

## 『白鯨』のかくれた意味と象徴(6)

前 田 禮 子

### ‘Chowder’

この章も一読して判読できるとはいえない。まず、IshmaelとQueequegは、Try Potという名の宿を探すことになっている。Spouter-Innの亭主が与えた道しるべは、「右舷に黄色い倉庫を見て進んで、白い教会が左舷に見えたら、それを左舷に取って進み、それから右舷に向って三点の角で進み、そこまで行ったら最初に通りすぎた男にでも宿屋をきけばよらしい、というのだ。」(阿部) これでは、実際にどう進んで行けばよいのかはかりかねる。IshmaelとQueequegも右舷と左舷の取りかたをめぐって意見がくいちがう。彼等がNantucketに着いたのは夜もかなりふけた頃であったから、黄色い倉庫や白い教会堂など、色彩を判別できない状況にある。Try Potは、上等の宿屋 (one of the best kept hotels p. 99)であるから、彼等が通行人に、Try Potはどこかといきなりたずねてもわかるはずである。そうすると、Peter Coffinが与えた指示は、エニグマである可能性がある。このあたりの文を見てみよう。

But the directions he had given us about keeping a yellow ware house on our starboard hand till we opened a white church to the larboard, and then keeping that on the larboard hand till we made a corner three points to the starboard, and that done, then ask the first man we met where that place was : (p.99)

この指示を図に描いて見るといくぶんわかり易くなる。黄色い倉庫を出発点Aとして、そこから左へ水平に、白い教会堂をBとして、Bまで線を引く。BからCまで、進行方向にむかって直角に線を引く。ABとBCの距離の比はわからないが、Cから3ポイントつまり約30°の角度で右折し、それらA、B、Cの三点の角でかこむ三角形をつくるよう、どうやらPeter Coffinは指示しているらしい。もしそうだとすれば、そして3ポイントを30°と取れば、AB、BC、CAの線分で、直角三角形ができる。これは建築のための測量にかかすことのできない定規を形づくっている。C点の角度が30°であれ $33\frac{3}{4}$ °であれ、B点が直角であれば、求める地点は、結果としてさほどかわりなく、ACの midpointになるものと想像できる。それには次のような理由が考えられる。 $33\frac{3}{4}$ °の角度で右折した (we made a corner three points to the starboard) となっているが、この英文は同時に、三つの点をそれぞれ三角形の頂点として結んだ角度とするならば、という意味があるように感じられる。at our first point of departureのpointはあきらかに一つの点のことを云っているのであって、1ポイ

ントという $11\frac{1}{4}^{\circ}$ の角度を意味しているのではない。黄色い倉庫を右に保ち、といっても、出発地点が倉庫の東西南北のどの方向にあるかによって進む方向がまったく違ってくるので、右に見て進む、あるいは、左に見て進む、が意味をなさなくなってくる。右方向あるいは左方向が東西南北に関係なく意味をもつ場合といえば、人の視線が白紙の画面に向い、そこに図をかきはじめる状態が考えられる。その場合、右手にまず倉庫を描き、そこを起点として左手に教会を描きこむ。そうすると *till we opened a white church to the larboard* の *open* には、やがて見えてくる、の意のほかに、図を描く、の意があると理解しても不自然ではない。同様に、*till we made a corner three points to starboard* も、三点を結んで三角形をつくり線上を右へたどる、の意がさほど無理なく汲みとれることになる。この三角形の一つの角度を $30^{\circ}$ ととってみる。また、通常町角は直角に交わっているので、すくなくとも一つの角度は $90^{\circ}$ であると考えられる。そうすると残る一つの角度は $60^{\circ}$ であることになるから、三角形の辺ABとBCの比は1:2である。Try Potは、CAの線上のどこかにあることになる。この三角形の斜辺であるCAはまた、この三角形に外接する円の直径になる。Try Potsの位置はおそらく、CAを二等分したところ、つまり外接円の中心点になるのではないかと想像できる。そうだとすれば、Peter CoffinがIshmaelに与えた道順の指示は、謎の問いかけであったことになり、IshmaelとQueequegはその謎を解いたことになる。求める地点が円の中心であるという解答は、この作品を解釈する鍵となる。この作品では、円の中心がつねに象徴的な意義をもっており、このことに注目するようにとの作者の意図が感じとれる。上の引用文は、この謎がスフィンクスのそれになぞらえられていることを示している。*and that done, and then ask the first man where the place was* は、それができたら通りがかった最初の人にその場所がどこにあるかを問うてみよ、であるから、また次の文からも、スフィンクスの謎のような意図が含まれていることが明らかである。

However, by dint of beating about a little in the dark, and now and then knocking up a peaceable inhabitant to inquire the way, we at last came to something which there was no mistaking. (p.99)

*beating about* と *knocking up* とには、闇の中を探しまわる、や、戸口をたたいて眠っている人を呼び起す、などの意と、打ちかかる、さんざん打ちすえる、など、スフィンクスが謎を解けなかった人にたいして振るまったとおもわれる行為が同時に浮き出されている。*peaceable inhabitant* や *inquire the way* も、おだやかな住人に解答を求める、の意が読みとれる。IshmaelとQueequegは結局謎を解くことができ、Try Potsをたずねあてる。この道順を読みとることを含めて、Try Potsでの経験が重要な象徴になっていることがすべて謎の形式をとって与えられている。Peter Coffinは、これらの儀式めいた経験をNantucketでのもっとも意義ある経験だと云ってIshmaelにすすめる。

In short, he plainly hinted that we could not possibly do better than try pot-luck at the Try-Pot. (p.99)

このようななんとも婉曲な表現の仕方で、Try Pot亭の意義が述べられていく。Ishmaelはこれについて、

these crooked directions of his very much puzzled us at first (p.99)

という。こうした注意を受けとめて読みすすめていくと、いくつかのかくされた意図があらわれてくる。

Nantucketに着いたのは夜遅くであったから、その日にしなければならない仕事は食事とベッドのことについてである、とIshmaelはいう。

It was quite late in the evening when……Queequeg and I went ashore ; so we could attend to no business that day, at least none but a supper and a bed. (p.99)

この作品の各章の構成は、きわめて緊密に計算されて組立てられており、各章のテーマはその章の書き出しの文章の中に簡潔ながら十二分に示されている。したがって第15章のテーマは、食事とベッドである。それにはPeter Coffinの従弟のHosea Husseyについてまず考えてみなければならない。Ishmaelたちは、結局Hosea Husseyに出会っていない。Hoseaのおかみさんに出会っているだけである。Husseyはhousewifeから由来しているから、Chowderの章では、Hoseaのおかみさんに意味があることになる。

Hoseaは、いうまでもなく、小預言「ホセア書」の預言者の名である。「ホセア書」の特殊な点は、Hoseaが淫行の女を娶るようエホバによって告げられたことである。IshmaelとQueequegがTry Potsに着いたとき、Hoseaのおかみさんは戸口である男にむかってどなりつけていた。この男はHoseaでもなく、奥にいる料理人でもない。おかみさんは、調理場にむかってIshmaelたちの注文を取り次いだのち、Ishmaelたちが食事を終えるまで姿を見せない。「ホセア書」から推しはかれば、おかみさんは「ホセア書」のHoseaの妻のような身持の女であったのかもしれない。ここでおかみさんが叱りつけている男は、おかみさんから拒絶されているのかもしれない。おかみさんは黄色い服を着ており、髪の色も黄色である。IshmaelはTry Potを探しあてるのに、黄色い倉庫から出発するよう指示されていた。戸口でおかみさんから返事をもらうのを待っている男は、紫色の羊毛の服を着ている。黄色と紫色は、「ホセア書」(2:8)のcorn and wineから引かれたものではないかとおもわれる。この男の羊毛の服も同様にwool and flay (2:8) から来ているのだろう。「ホセア書」には、she went after her lovers, and forget me (2:13) とある。Try Potのおかみさんは「ホセア書」を下敷きにされていると見てさしつかえないだろう。「ホセア書」では、淫行の妻は比喻にすぎず、神から離れているイスラエルの民の不義が、Hoseaの妻という表象でもって喩えられている。「ホセア書」では、神とイスラエルの民との関係をHoseaと彼の妻との関係でもって喩えているのである。神と民との関係を結婚の喩えでもって表

現しているのである。それは次のように書かれている。

And I will betroth thee unto me for ever……I will even betroth thee unto me in  
faithfulness : and thou shalt know the Lord. (2 : 19-20) (AV)

われ汝を娶りて永遠にいたらん……かわることなき誠をもて汝を娶るべし、汝エホバ  
を知らん。(2 : 29-20)

‘Chowder’の章のテーマが食事とベッドであるとIshmaelはいうが、このばあい食事もベッ  
ドもいずれも結婚にむすびつけられた意味をもつと考えられる。ベッドは、Spouter-Innに  
つづいてTry PotでもIshmaelとQueequegの密儀めいた結婚を意味するのであろう。Ishmael  
は、a bed(p.99, p.100)とあって、あくまでも単数のベッドであることを示す。食事のClam  
とCodも結婚に関する比喻として用いられているだろう。Clamには、Quahogの意がある。  
これは二枚貝の意で、QueequegがPequod号の船主によって呼ばれていた名であるし、Quee-  
quegが彼の印字として署名に用いた符号は二枚貝の形をしている。Clamには、Clamp, Clasp  
(締めつける)の意がある。これらの語から女性的な象徴を感じとることは困難ではない。  
Codには、testes(睾丸)の意がある。Queequegが二枚貝の識章を用い、Ishmaelの名がIssue +  
Maleをおもわせることから、二人の関係あるいは役割を想像することができる。Ishmael  
は表面に立ち、言葉によって世界観を表現する。彼がいわば陽の立場にあるとすれば、Queequeg  
はIshmaelと対称的である。Queequegは、外見上はたくましくはあるが、役割は受動的で  
女性的である。QueequegがClamとすればIshmaelはCodとして象徴されるといえようか。  
Codは魚であるから、鯨も魚としてとらえるとき、Codと鯨が同じものを表象していること  
にもなる。しかし一概にそうは云えないものがある。Pequodという船名はおそらく、pea +  
Cod=pea + pod (豆のさや)の意があるのだろう。船と鯨はどちらも巨体であるが、その  
関係は、女性的あるいは男性的といえる概念でとらえることはできる。しかしCodを豆など  
のさや、船体、などのイメージと重ねるなら、Codの心象をどちらがどちらともきめかねる  
のであるが、それでよいのだろう。同一のものが時に応じてその性をかえると受けとる方  
がよいのだろう。‘Chowder’の章の問題点がClam or Codという語句にあることはいうまで  
もなく、IshmaelとQueequegは、Clam or Cod?という問いにたいして、どちらか一方に  
片寄ることなく、ClamとCodの両方を取るという選択をすることによって、男性原理と女  
性原がいずれも不可欠であるとする解答を与えたことになり、彼らは秘儀参入とも云うべ  
き通路の一つを通過できたといえるだろう。彼らは、朝食についてもClam or Cod?と問わ  
れるが、Both (p.102)と答えて、スフィンクスの謎に似せて問われるエニグマを解いたこ  
とになる。

ClamもCodも海底から来たものである。これを食べることは、秘儀参入の出発点におい  
て大地の胎内をくぐり死と闇を通過する儀礼にあたる。ClamとCodに、このような意味も  
ふくまれていることは、つぎの文から明らかである。

“Clam or Cod? She repeated.

“A clam for supper? a cold clam; is that what you mean, Mrs. Hussey?” says I; “but that’s rather cold and clammy reception in the winter time, ain’t it, Mrs. Hussey?”

(p.101)

この文では、clamからはclammy (冷たく、じとじとする) の、またcodからはcold (冷たい) の語感が伝わってくる。cold clamの語句には、coldとcodが同じ語であるかのように感じさせる意識的な語の配列がある。またthat’s rather cold and clammy receptionについても同様で、cold and clammyの中にcodとclamのひびきを感じられる。receptionにも、接待、と、印象の感受、の意がふくまれているから、上の文を読むとき、clamとcodから、冬の海底のイメージが伝わってくる。この文は、Melvilleが表面と表面下の二通りの意味を一つの語にふくませるときの常套的手法である。語感の中に手掛りがしのばせているのである。つぎの文もそのような例の一つであって、上の文のすぐあとに続いている。Try PotのHoseaが不在がちであり、おかみさんが「ホセア書」のHoseaの妻と同じ種類の女性であるらしいことが感じとれる。

And so it turned out; Mr. Hosea Hussey being from home but leaving Mrs. Hussey entirely competent to attend to all his affairs. (p.100)

But being in a great hurry to resume scolding the man in purple shirt, who was waiting for it in the entry, and seeming to hear nothing but the word “clam,” Mrs. Hussey hurried towards an open door. (p.101)

### ‘The Ramadan’

QueequegとIshmaelの関係は、ちょうど双児座のCastorとPolluxのように示唆されている。‘The Ramadan’の章のつぎの文から、それがうかがえる。

①I thought he might have had an *apoplectic* fit. (p.122)

②*Apoplexy*! I tried to burst open the door; (p.122)

③Mrs. Hussey! *apoplexy*!—and with these cries…… (p.122)

④having just broken away from the occupation of attending to the *castors*,……

(p.122)

⑤Run for God’s sake, and fetch something to *pry* open the door—the *axe*! (p.122)

⑥When Mrs. Hussey interposed the mustard-pot and vinegar-cruet, and the entire *castor* of her countenance. (p.122)

⑦“Get the *axe*! For God’s sake, run for the doctor, some one, while I *pry* it open!”

(p.122)

①②③の引用文のapoplecticやapoplexyの語の響きの中からは、双児兄弟の一人Pollux

の名が浮び上ってくる。また④と⑥のcastorからは、いうまでもなく兄弟の他方のCastorの名が意図されているといえるだろう。さらに⑤と⑦にはpryとaxeがあつて、不完全な形ながらPolluxの名がかくされているのではないか。これらの語は同一ページ内に書かれており、いずれも二度ないし三度同じ語が繰り返されているが、冗漫や無作為によるものとはいえない。すでに見てきたようにMelvilleの文はきわめて精巧に組み立てられており、冗漫や、無作為に見えるようにたくみに見せかけてあるだけのことである。このような文体がこのように大部の作品の全体を通して試みられている例は類を見ないといえる。

双児宮Geminiは、ギリシャ神話の双児神Dioscuriからきており、神の息子たちの意をもつ。Polluxは不死、Castorは可死の身であったために、死によって離されることになる。Ishmaelが生き残って語る形式は、この作品の最初の部分においてすでに一貫性と論理性をもつものとして準備されている。Ishmaelの述べる説や事例がMelville自身の体験と混同されているように見えて、そのことがこの作品の欠点であるといわれている考え方は再考を要するのではないか。Ishmaelが神出鬼没でありさまざまな時代にわたって体験を重ねても不思議ではないことになる。Ishmaelは風のようにさまざまな場所と時代を通鑑する。

Ishmaelの語る物語は秘跡にみちている。Ishmaelは死の彼方につねに再生と永遠の生命をみつめている。不死者としてのIshmaelと可死身のQueequegは、両極のように見えながら、本質では二者は不可分の関係にある。天上的なものと地上的なもの、男性的なものと女性的なものなど相反するかに見えるものが本質ではつながっている。この作品は二重構造になっており、深遠とナンセンスが言葉という象徴記号の中で深く結びついているといえる。

『白鯨』が神話を下敷きにして組み立てられているとすれば、その原型はアルゴ船探検隊Argonautsの物語であるのはいうまでもない。金羊毛が白鯨に置きかえられていると考えれば、Melvilleはそれについて述べていないが、なんらかの形で白鯨探究の旅が成就された可能性がある。この作品がもつ意味の、表層部分では白鯨捕捉に成功していないが、秘跡としての意味では、白鯨を仕止めていないとはいえない。PolluxとCastorは原型では偉業を認められて船乗りの守護神として、また兄弟愛の典型として知られている。双児座の支配星は水星Mercuryであるが、Mercuryはローマ神話では、神々の使いの神で雄弁、職人、商人、盗賊の守護神、ギリシャ神話のHermesに当たる。Ishmaelの雄弁は、carrier of newsとしての面目を示すものである。HermesあるいはMercury(水銀)の名は、魂と物質の結合と変成を求める錬金術の秘跡と切り離すことができない。不死身のPolluxは、Castorが死んでから、Zeusの許しを得てCastorとともに一日おきに天上と地下Hadesに暮したというが、Geminiの二星は死と復活の秘跡を日夜反復しているといえる。Castorが復活を得た神話がIshmaelとQueequegの関係の原点に据えられていると考えれば、Queequegの果す死の意義は復活を得るための通過儀式であるとうかがえる。

上述の引用文のcastorには、重い家具などに付ける脚輪の意があるが、'Wheelbarrow'の章で脚輪のもつ比喩としての意味が述べられている。脚輪の意のcastorはveer, turnから転じたものである。可死の身を運ぶ輪廻の乗物の意もあるが、船の進路を変える、進路を導くなど新しい境地を開くの意がある。Billy BuddのVier船長の名にそのような意が含まれているのではないか。veerやturnには変成の意が感じられる。veerには、風向きが変わる、とくに東風が南東風に、南西風が西風に、というように右回りに変る、順転する、の意がある。『白鯨』では状況が新しく進展するときしばしば右舷側starboardに起る。castorにはchestnutの意があるが、第VI章*The Street*ではhorse-chestnutやmaple (p.62)を例にあげて、樹木の象徴性について述べられている。castorにはまた、薬味入れ、薬味びんcruetの意があつて、上述の引用文と同一ページにcruetの語が見られる。

⑧Mrs. Hussey soon appeared, with a mustard pot in one hand and a vinegar-cruet in the other, having just broken away from the occupation of attending to the castors, and scolding her little black bay meantime. (p.122)

⑥when Mrs. Hussey interposed the mustard-pot and vinegar-cruet, and the entire castor of her countenance. (p.122)

⑨quickly putting down the vinegar-cruet, so as to have one hand free ; (p.122~3)

⑩Unconsciously clapping the vinegar-cruet to one side of her nose, she ruminated for an instant ; (p.123)

このようにcruetについての言及が重複していることから、castorやcruetの薬味びんとしての意が強調されているのは明らかである。cruetには宗教儀式のための祭壇用びん(ampulla)の意がある。ミサなどに用いるぶどう酒または水を入れる小容器である。このような容器からは錬金術の試薬びんが連想される。

Queequegは一昼夜断食をする。そのあいだ頭に偶像を乗せたまま身動きもしない。この状態はQueequegが儀式を通して死を経験しているといえる。翌朝、曙光とともにQueequegのRamadanは終り、彼はいわば死と復活の秘儀を通過したといえる。IshmaelとQueequegはPolluxとCastorの関係を模倣し、原型を確認するかたちになっている。

### 'The Prophet'

Elijahという名の予言者があらわれるが、彼の顔には一面にあばたがある。これは、いわゆる聖痕と呼ばれるもので、神秘的な力をもつ人や、神によって選ばれた人に、しばしばあらわれると考えられている。Elijahのあばたには、普通ではない顕著な特徴がある。

A confluent small-pox had in all directions flowed over his face, left it like the complicated ribbed bed of a torrent, when rushing waters have been dried up.

(p.132)

白鯨の汐吹きは熱くて、それを浴びると、火ぶくれができるので、おそらくElijahは、天然痘にかかったのではなく、白鯨の潮吹きを浴びたために、そのような顔になったのだろう。彼の顔はほとぼしる水をあびて、それが退いたあのような、水が合流したような、水の飛沫が散ったような跡をとどめている。Jeroboamという名の船に乗っていたGabrielの顔にも一面にそばかすのようなものがついている。これも、おそらく白鯨との出会いと関係があるのだろう。ElijahにもGabrielにも、未来や人の心を読む予知力がある。Ahabのひたいにも稲妻型の烙印がついている。これらは、まじかに白鯨に接したためにできたのだろう。これらの痕かたは、聖痕と呼ぶべきものだろう。そうすると、ElijahとGabrielに予知力があるように、Ahabにも、そのような力があると考えべきだろう。白鯨のような超自然の存在にふれると、身体に影響を蒙るばかりか、精神にも影響を受け、超自然の属性を身に帯びる、と考えるべきだろう。しかしGabrielは以前から、予言者であったようなので、選ばれて捕鯨船に乗ったというべきかもしれない。

Elijahは、Ahabが片足を失っているように、左腕を失くしている。それは、つぎの文からわかる。

“He's (=Ahab) sick they say, but is getting better, and will be all right again before long.”

“All right again before long!” laughed the stranger (=Elijah), with a solemnly derisive sort of laugh. “Look ye ; when captain Ahab is all right, then this left arm of mine will be all right ; not before”. (p.133)

Ahabが元気になって元どおりになるだろうと、Ishmaelが云うと、Elijahは、そんなことになるなら、その前に自分の左腕もよくなるだろう、と云う。ElijahはPequodに向って腕をふり上げて、指でさし示すが、そのときの腕の具合がおかしい。

“Aye, the Pequod—the ship there,” he said, drawing back his whole arm, and then rapidly shoving it straight out from him, with the fixed bayonet of his pointed finger darted full at the object. (p.132)

Elijahが振り上げた腕が左手であったかどうかは書かれていない。船を指している人差指がかさばっていると書かれている。

……levelled his massive forefinger at the vessel in question. (p.132)

このように、Elijahの左腕が実際はどういうふうになっているのか、白鯨によってどうなったのか、なっていないのか、については何も書かれていない。だから、彼の腕が白鯨によって、どうかしたと断定もできないが、以上のような、彼の腕が義手であるかもしれないように、たびたび言及されている文章から見て、腕がそうでないと断定することも不可能である。このように、断定と否定のあいだに間隙ができるように工夫されて、手掛りが、いたるところに網の目のように張りめぐらされており、ambiguityなどと云えるような程度

をはるかに越えている。ジグソー・パズルのように、一つ一つは意味がないように見える断片が、すべて有機的につながるような構成になっている。Elijahの腕について言及がまだある。Ishmaelが、冗談めいて、この男は、タガがはずれている、と云うとElijahは、そのとうりだと云う。ただし、そのとき同時にAhabのことも話し合っていたので、どのことに対して、Elijahが、そのとうりだ、と云ったのか、わかりにくい。それは、つぎの文による。Ishmaelは、はからずもAhabについて述べたことになる。

“Queequeg,” said I, “let’s go ; this fellow has broken loose somewhere ; he’s talking about something and somebody we don’t know.”

“Stop !” cried the stranger. “You said true——ye hav’n’t seen Old Thunder yet, have ye?” (p.133)

‘The Prophet’の章の、単語による暗示や含みとして、以下のようなものが読みとれる。

まず、Elijahが犬のようであると示されている。彼はIshmaelとQueequegのあとをつける。つぎの文では、犬のようにあとをつけてくる、というのが強調されている。

……looking back as I did so, who should be seen but Elijah following us, though at a distance. Somehow, the sight of him struck me so, that I said nothing to Queequeg of his being behind, but passed on with my comrade, anxious to see whether the stranger would turn the same corner that we did. He did ; and then it seemed to me that he was *dogging us*,……whether this *ragged* Elijah was really *dogging* us or not,…… (p.135~6)

(斜体字 前田による)

ここで使われているdoggingはraggedと対になっている。Ishmaelは、this ragged old sailor (p.135) と云っている。Elijahの服装は、このように

He was but shabbily apparelled in faded jacket and patched trowsers ; a rag of a black handkerchief investing his neck. (p.132)

ボロボロであるが、raggedには、動物の毛がもじゃもじゃ、とか、毛がたれている、の意があって、犬の毛のような、の意もうかがわれる。犬は、冥府の番人・案内者と考えられており、Elijahがそのような役柄をもち、予言を司どる月の女神ヘカテの使者として置かれていると云える。上の文でわかるように、彼は首に、黒いボロ布をまきつけている。このhandkerchiefは、‘ETYMOLOGY’でTHE pale Usherが古文法書のほこりを払うのに使っていたものと対称になっている。彼もボロをまとっていた。

THE pale Usher-threadbare in coat, heart, body, and brain ; I see him now. He was even dusting his old lexicons and grammars, with a queer hankerchief, mockingly embellished with all the gay flags of all the known nations of the world. He loved to dust his old grammars ; it somehow mildly reminded him of his mortality. (p.3)

pale Usherの持っていたハンカチには、世界の国々の旗が、縫いとられている。色とりど

りのハンカチは、そのはなやかさによって、彼のmortalityを感じさせる、と書かれている。Elijahの黒いハンカチが冥土を思わせるなら、pale Usherのハンカチは、やがて死ぬべき運命の人々が住んでいる現世をおもい起こさせることになる。Elijahは犬のように、あの世の案内人のように描かれており、pale Usherも、案内役、導者、取り次ぎ、など同じ意味をもっている。どちらもボロ衣を着て、行者のような、世俗を超脱した姿をしている。Usherは大文字で綴られているので、pale horse, pale riderのような、幻の姿、つまりphantom of lifeのイメージ化されたものでないだろうか。白い鯨もphantom of lifeのイメージ化されたものであると考えられる。この点については、「『白鯨』のかくれた意味と象徴について(1)」で述べた。

単語のもつ暗示力を取り入れるもう一つの単純な例は、humbug, bugbearなどに見られる。IshmaelはElijahを、言葉たくみに、おもわせぶりに人をだます、と云うが、Melvilleの方が、読者をbamboozling (p.134) している。

(we) agreed that he was nothing but a humbug, trying to be a bugbear. (p.135)

I pronounced him in my heart, a humbug. (p.136)

bugという語が強調されていると思われる。bugは、beetleと同様、エジプト神話で尊重されている黄金虫である。hum-は、ぶんぶん云う、-bearは、持つ、ぐらいの意か。黄金虫は、両性具有、太陽、を象徴し、死の前ぶれを知らせるとされている。キリスト教劇でも、入信者通過の儀を意味する。黄金虫は、フンの玉ころがしから発生すると考えられていた。土の中に埋められて、ふたたび土の中から生れ出る。洗礼の水に浸されて復活する、という考え方から、黄金虫は、死と復活の象徴とされてきた。また、西の方に向かって歩く、と考えられたため、darkness, obscurity, shadowsを象徴するとされている (*Mythology*)<sup>1</sup>。Elijahは、死と再生にかかわる者としてのニュアンスをもつ。

このような表わし方は、ほかにもある。Elijahが犬であるかのようにえがかれているが、犬が象徴として表わしていると考えられているものに、ほかにどんなものがあるかといえ、天の犬のとして曙をあらわす、とか、an aid to rebirth, a destroyer of will, pathfinder, savior (*Mythology*) などがある。Elijahは、IshmaelとQueequegにむかって、

“Morning to ye, shipmates, morning ; the ineffable heavens bless ye ;” (p.134)

“Morning to ye, shipmates, morning.” (p.135)

というが、あなた方に朝が来ますように、には、夜ののちに朝が、死ののちに復活が、来ますように、といった意味があるだろう。その祝福とも云える言葉をきいて、またElijahの云うさまざまな暗示をきいて、Ishmaelは、さまざまな不思議が起るだろうことと、それらに対する了解があいなかばする思いがあった。つぎの文中の、wondermentsとapprehensionsであるが、wondermentsには、すばらしく良いことを含めた、驚異、の意が、またapprehensions

には、気づかい、心配という意味もあるが、理解、わかった、の意の方が強いとおもわれる。Ishmaelは、Elijahの言葉の意味を理解している。表面上は、Ishmaelは何もわかっていないように見えるだけである。

But if you are speaking of Captain Ahab, of that ship there, the Pequod, then let me tell you, that I know all about the loss of his leg.” (Ish.)

“All about it, eh—sure you do?—all?” (Eli.)

“Pretty sure.” (Ish.) (p.134) (斜体字Melvilleによる)

この会話から、Ishmaelが多くを知っているということを読者になかば知らせながら、同時に、つぎの文のようにIshmaelは何も知らないかのように、Melvilleは見せかけている。

……and then it seemed to me that he was dogging us, but with what intent I could not for the life of me imagine. (p.135)

……I pronounced him in my heart, a humbug. (p.136)

IshmaelはElijahを、ペテン師 (humbug) だと心の中で決めてかかった、と書いてあるように見えるが、humbugには、黄金虫、の意があるなど、また、Elijahがなぜついてくる (dogging) のかさっぱりわからないと云いながら、Ishmaelはdoggingの意味を読者に強調している、など、こういった手法は、Melvilleにかぎらず、多くの作家が読者をbamboozlingするごくありふれた手法である。船出にさきだつ一週間の準備期間の説明にあたって、とくに多く、このたぶらかし表現をIshmaelは用いている。XXII章で、船は降誕祭の日に航海に出るが、それまでの章には、航海のためのイニシエーションにあたるため、多くの暗示が、凝縮されてつめこまれている。例えば、この章では、

This circumstance (Elijahが尾けてくること), coupled with his ambiguous, half-hinting, half-revealing, shrouded sort of talk, now begat in me all kinds of vague wonderments and half-apprehensions, and all connected with the Pequod ; and Captain Ahab ; and the leg he had lost ; and the Cape Horn fit ; and the silver calabash ; and what Captain Peleg had said of him, when I left the ship the day previous ; and the prediction of the squaw Tistig ; and the voyage we had bound ourselues to sail ; and a hundred other shadowy things. (p.135)

引用文中の、Captain Pelegの名は、Peel (はぎ取る)+legからきているだろうし、squaw Tistigの名は、T'+stig (T'<to a T [ti:z], stig<sterling, 純銀の意か) からできているとおもわれる。the Cape Horn fitとsilver calabashには、かくれた意味がある。Cape Hornについては、『『白鯨』のかくれた意味と象徴』(2)で、ある程度説明している。‘Spirit Spout’や‘The Albatros’の章でも、Cape Hornについて説明することになるだろう。Cape Horn沖を通過したとき、Ahabは発作におそわれて三日三晩こん睡状態になる。これなどは、一種のひょうい現象で、これがおそらく、Ahabが白鯨探求に駆りたてられる最初のき

っかけとなる。ここで、この作品の特異性について心にとめておかねばならないことがある。それは、この作品では、目に見えない霊的なものと、目に見える可視的なものと、一体となって溶け合っている、ということである。Ahabは、Cape Hornで神憑りになって、霊的な、なにかある力によって選ばれて、信号を送られた、とでも云おうか。上にあげた引用文から、Ishmaelには、時間と空間を跳びこえた感知力があると云えるだろう。彼は、上にあげた文の、Elijahが伝えた断片をつなぎ合せ、a thousand other shadowy thingsを直観で知ることができる。Elijahも、つぎの文のように、神人合一のような状態で、事物にまつわる見えない部分を知ることができる。

With finger pointed and eye levelled at the Pequod, the beggar-like stranger stood a moment, as if in a troubleed reverie ; then starting a little, turned and said : —“Ye've shipped, have ye ? Names down on the papers ? Well, well, what's signed, is signed ; and what's to be, will be ; and then again, perhaps it won't be, after all. Any how, it's all fixed and arranged a'ready ; (p.134)

Elijahは、目の高さに指をのばしてPequodをさし、ひょう憑状態のような、as if in a trouble reverieの様子で、じっと船を見つめ、そのようにしてIshmaelが契約の署名をすませたことを、また運命の定めたなりゆきを把握する。

silver calabash (銀製の水入れ) とTistig (純銀) とは関連があるだろう。まず、Santaの祭壇の前でAhabがスペイン人とすもうをとったそのスペイン人は、the Spaniad, そのスペイン人、となっているので、聖書のヤコブの故事にちなんだものだろう。この故事の中心は、ヤコブが天国へ行く階段を見たことである。このヤコブと十二使徒のヤコブが、『白鯨』の中では、重なり合って、同一人物であるかのようなかたちで、スペインの守護聖者ヤコブとして表わされ、この聖者の伝説が、そのスペイン人、として、ここで引かれているのではないか。スペインのヤコブ聖者は、杖とひょうたん (calabash) の水筒をもった旅人の姿であらわされる。祭壇は、この聖者を祭ったものだろう。銀製の水差しは、この聖者の祭壇に置かれたものだろう。場所が、スペインではなくて、なぜSantaになっているか。聖ヤコブの聖を強調したかったのかもしれないし、skrimmage, Spaniad, Santa, silver, spatと、silverのsを残響させているか、あるいはまた、'Town-Ho's Story'のLimaと同じように、赤道周辺にあり、東経・西経180°、つまりPequodの沈んだ海からもっとも近い陸の地名だからだろうか。赤道は、太陽の通る道・黄道と交叉するからか、または太陽にもっとも近いためか、この作品では聖なる位置とされている。'Doubloon'のQuitoも、SantaやLimaに近い。金貨は太陽を形どったものである、など、これらの地名が太陽の通る道と近いことから、MelvilleはSantaと書いたのではないだろうか。Tistigは、月を象徴する銀貨、の意ではないだろうか。インディアン女Tistigの予言、と書かれているが、月は冥界を支配し、予言を司どる。Elijahは、聖書の予言者の名であるし、Ishmaelも過去

や未来を知ることができる、など、予言者である。Elijahの顔は、月の表面のようである、など、この章で、月の象徴である銀貨に言及があっても不自然ではない。金貨を中央の帆柱に打ちつけて、それを中心にAhabが規則的に行ったり来たりするが、これは、金貨を太陽の象徴とみて、太陽が北回帰線と南回帰線のあいだを一年で往復するその運行をAhabがまねているのである。ということは、帆柱の金貨のあるところが、春分点・秋分点である。金貨のところに来ると、Ahabは、立ち止ってじっと金貨をみつめる。これなどは、Elijahが、腕を伸ばして、指をつきつけ、入神状態でPequodをじっとみつめるのと対称になっている。月のばあいは、春秋分点などないので、そのかわり、月が太陽や地球とかかわる運動の、合 (conjunction) や衝 (opposition) などの現象を、Elijahはまねているのではないだろうか。ElijahはIshmaelとQueequegのあとを尾けて、忙しく路上を往き来するが、これは、めまぐるしく空を往き来する月の動き、太陽や地球との位置関係や角度などをたとえたものかもしれない。Elijahは、

A soul's a sort of a fifth wheel to a wagon. (p.133)

と云って、運命のさきざきのことを気にかけるのは、乗物の第5番目の車輪のように不必要なことだ、という。この、乗物 (wagon) という言葉の中には、運命の車輪、人間の肉体、のほかに、太陽や月などの天体、も入っているだろう。'Wheelbarrow'の章の意味を考えれば、そのことは、あきらかである。スペインのヤコブ伝説と『白鯨』とのかかわりについては、'Heads or Tails'ほかで、述べる。

Elijahは、AhabのことをOld Thunder (p.133)と呼んでいる。神話に、The celestial dog was a lightning and thunder deity. (*Mythology*) とあるが、dogが雷神であったとみられていたのを、Melvilleが知っていたために、ElijahがOld Thunderと云ったとすれば、面白いと思うが、Melvilleがそういうことを意識して書いたかどうか。dogが月の女神Artemisの従者であったから、予言者Elijahをdogとして象徴するのは、当をえている。

ヤコブ伝説とAhabはどのように結びつくのか。じつは、両者は深い関係がある。*Mythology*によると、つぎのようになっている。少し長いが、さまざまな意味でAhabと関係があるので、引用してみる。

JACOB ; Literally, heel-god or heel-holder ; ……progenitor of the Israelites. ……On his travels he stopped to sleep and dreamed of a ladder reaching from earth to heaven ; when he awoke he called the sone he had used as his pillow Beth El (House of God). At Peniel he was forced to wrestle with a man all through the night. Jacob's opponent, unable to vanquish him, smote his thigh and it became disjointed. ……Jacob is regarded as a sun-deity, and, like sun deities, was forced to wonder (across the sky), he had an injured thigh, which caused him to have a sacred heel or toe that did not touch the ground ; he served others as a menial for the benefit of mankind (tilled the soil) ; he was

in conflict with the deity of darkness, Esau, the moon-deity, whom he outwitted, he was associated with stone worship. Leah typifies the dawn ; Rachel the moon ; his children the stars. In cabalistic tradition Jacob was under luna influence and Esau under solar domination and, for this reason, Jacob was destined to rule over nations here on earth, whereas Esau destined to rule in the world to come.

ここでわかることは、ヤコブ Jacob の字義どうりの意味は、かかとの神、かかとをつかむ者、である。彼は、旅の道中、眠って夢に、地上から天へとどく梯子を見る。目がさめて、彼は、枕にしていた石を Beth El (神の家) と名づける。El は、神、の意。cf. Elijah の名。Peter Coffin や Don Pedro など、岩、を意味する名の人物が、作品中に出てくる。'New bedford' の語の中にかくされている、岩、のもつ意味については、『白鯨』のかくれた意味と象徴(2)を参照。岩は、家を建てるいしずえとして重要視される。家とは、神の家、神殿、また、人間の肉体(神が宿るための)など、秘跡としての意味があり、『白鯨』の主題の一つである。ヤコブはある男と一晩中すもうをとる。その男は、ヤコブに勝てないので、ヤコブの腿を打つ。腿は、関節がはずれてしまう。このあたりの故事は、あきらかに作品に取り入れられている。Ahab がヤコブを迫体験しているようなところがある。Ahab (éihəb), Jacob (dzéikəb), 発音が似ている。Ahab の名には、ほかに意味があるが、それは、ここでは問わない。ヤコブがすもうをとった男の名は El という。El に勝った者、の意をもつ Israel という名を、その後ヤコブは名乗ることになる。Ahab が Samuel Enderby に錨綱をつたって、よじ登って上船するのは、ヤコブの梯子をかたどっている。ヤコブは、太陽神としてみなされている。太陽が空を渡って旅するように、ヤコブも放浪をよぎなくされる。彼は、腿の関節がはずれて、歩くとき、片方の足のかかとを大地に踏みしめて歩くことができない。そのため彼のかかとは、聖なるかかと、と呼ばれている。太陽が大地に触れると、太陽が死ぬと云われる。太陽の通る道・黄道は、秋分点で、天の赤道(地球の)と接し、この日から海の下へもぐっていく。これを太陽の死と云っているが、これが太陽や王の足が地面につくと死ぬと云われるいわれである。Pequod は、秋分の日頃、海に沈むが、これは、太陽の動きと軌を一にしている。Ahab が甲板の上で彼のかかとの音を響かせ、時をきざんでいる理由がわかる。太陽が人間に利益をもたらすように、ヤコブは、人のためにつくして働く。これは、ヤコブが二人の妻、Leah と Rachel を得るために義父のもとで大地を耕して働いたことをさす。Pequod は、太平洋で、Rachel と Delight に出会う。この二つの船に出会うことは、旅のおわりを意味する。ヤコブは、つまり、Ahab は、苦難を乗り越えて、妻 Rachel を得て、Delight を見る。Ahab の旅は殉教であるらしく、『白鯨』は、福音の書である様相をおびてくる。そういえば、太平洋は、絶対の平和・ニルヴァーナの海であることになる。また、太平洋は、大きな水盤、聖杯である。Ahab は、聖杯探求の騎士である、と同時に、金羊毛 (Golden Fleece) ・幻の白い鯨を求めるユリシーズであることになる、な

どなど、Melvilleの夢の構図が見えてくる。ヤコブは、闇の神性・月の神性としてのEsauと抗争し、彼を制する。一晩中取っ組んだまま過し、朝になって勝負がつくのは、太陽と闇との勢力争い、ということになる。ElijahがIshmaelとQueequegに、Morning to ye、と何回か重ねて云うのは、Melvilleが、ヤコブの太陽神として故事をふまえてのことだろう。ヤコブは、岩石崇拜と結びついている。ヤコブが最初に得た妻Leahは、曙、を象徴したものである。彼が二番目に得た妻、Leahの妹Rachelは、月を象徴する。ヤコブが最初から求めていた妻である。ヤコブの子供たちは星である。太陽と月は、夫と妻であると昔から考えられてきているので、夜どうし組打ちをしたと云っても、これを、太陽と月との交合、と考えることもできる。美しい曙のLeahは、太陽が目を覚ましたときに、わずかに夫と相見するのだろうか。‘Symphony’は、ヤコブとRachelとの婚礼の儀、天と地の交合、その歓びから生れる地の平和、美しい自然、などと考えることもできるが、それでは、白鯨との戦いは何のためか、ということになる。いうまでもなく、白鯨との戦いは、ヤコブとEL(=神)とのすもうである、と同時に、ヤコブとRachelの婚礼である。男根にそっくりの形の白鯨が、spermの汐を吹き上げて、女性の象徴である船に穴をあける。結婚からは、なにかが生れることが予想される。それは何か。新しい生命、イザヤの約束する新天地。Ahabが死を通過し、mortalな部分をぬぎ捨て、やがて新しい永遠の生命へと復活する。Pequodが沈むこの日は、黄道と、地球から見た天の赤道とが交る。太陽は、この日から、つぎの年の春分の日まで一年の半分、海の下で、夜の闇と戦いながら、あるいは、夜の女王、月と睦みながら過す。人々は、この日を、生命の復活の日として祝う。黄道が、この日、海から上ってきて、地平線上に顔を出すからである。ヨナの鯨が海から上ってくる日である。ヨナの鯨は、太陽の運行を象徴したものである。黄道が地球の地平線の下にかくれ、ふたたび海上に姿をあらわすまでを、半年間という長い時間の経過があるので、長い巨大な姿の、ヨナの鯨として太陽が象徴されている。鯨は、生命の誕生に関与するもののように聖書に記されている。鯨が最初の被造物であったこと、神は、鯨にむかって、アダムとイヴにむかって云われたのと同じように、生めよ、ふえよ、地に満てよ、と祝福しておられる。生産は、太陽の力による。したがって、ヨナの鯨→男根→太陽神、の図式が成立つ。Melvilleは、ヨナの鯨は抹香鯨でなければならないと考える。spermwhaleの、spermという分類名と、形の相似が、聖書の創世神話の、生殖・豊穡の精神を、もっとも具体的に表象しているからである。

太陽神としてのヤコブをAhabが模倣している、ということについて考えてみる。一年の半分は、昼の時間の方が長いので、太陽が支配する世界であるとすれば、他の半分は、夜の時間の方が長いので、その間は、夜の力が世界を支配していると云えるだろう。あるいは、その間、太陽は、夜どうしすもうをとって、闇の力に抗している、と云ってよい。ということは、毎日一回、夜と昼がきて、また一年に一回、夜と昼があつて、ヤコブは、そ

のたびに、今もずっと、すもうをとっていることになる。そのたびに、ヤコブと太陽は、死と復活をくり返していることになる。それでも、太陽は、神々のように不死であり、不死性が目に見えるかたちに具象化されたものであるから、Ahabは、不死を願って、太陽を模倣しようとする。そのために、彼は、太陽神と云われるヤコブの模倣をしようとする。Ahabは、キリストの模倣もしようとする。キリストの復活と不死は、太陽のような転輪性を超越した無辺のものであるからだ。結局、Ahabは、形のあるものから入って、形を超越したものへ解脱しようとする。この作品は、作品全体を一貫して、形あるものと形のないものが、不可分にかみ合っており、形のないものは、形のあるものを媒体にして認識され、形のあるものは、形をもたぬ精神によって、調和、有機性、意味を与えられる、そのような構成になっている。象徴と意味、これが、この作品の横糸・縦糸であり、そこには、登場人物の織りなす模様はあるが、その模様は、必然であって、偶然ではないようにおもえる。‘*The Prophet*’の章の、語句の一つ一つが、象徴であり、意味をもっているのが、以上の説明から、理解ねがえたと思う。『白鯨』のページのどこにも、無駄な語句はない。無駄や冗長のように感じられるばあいは、理解が至らないためである。『白鯨』は、ふしぎな構成の作品である。これに類する、統一と意味、象徴、をもつ書物は、聖書だけである。最後になったが、*Mythology*によると、カバラ(神智学とでも)の伝承では、ヤコブは月の影響を受け、双子の兄のEsauは太陽の支配を受ける。この理由によって、ヤコブは、地上の諸民族を支配し、Esauは、あの世を支配するよう、定められているという。ヤコブ伝説が、『白鯨』と深いつながりがあるのがわかった。スペインのヤコブ巡礼との関係については、改めて述べる。

ほかに、‘*The Prophet*’で気がつくことは、他のすべての章にも共通することだが、ElijahもIshmaelも、yes、と云うかわりに、Aye、と云う。これは、eyeの同音異議語であり、彼らが、事象の奥にある意味を認識することができるのを、また、彼らが、いわば、天眼を持っているのを、このような、まるで符謀のような応答で示しているのだろう。彼らは、互いに呼びかけるとき、“Look ye; (p.133) (Elijah) や“Look here, friend,” (p.134) (Ishmael) というが、同じように、見る、という語が使われて、passwordめいたところがある。太陽は、昔からしばしば、一つの眼、として表わされていることがある。Lookの綴りには、Oが2個あるが、これは、視覚でとらえられる、一對の眼を表わす記号として考えてよいだろう。『白鯨』では、ひんぱんに、こうした使い方がされている。

Elijahによって語られるAhab像は、スペインと関係が深いヤコブ伝説と類似している。Ahabは、前回の航海で、ペルーのSantaでスペイン人と格斗したことが語られる。これは、ヤコブが天使と格斗した故事にちなんでおり、今回の航海にさきだち、Ahabになんらかのイニシエーションがあったものとおもわれる。ヤコブの梯子が典拠とおもわれる比喩は、『白鯨』に数多く見うけられ、Mapple神父の説教壇やSamuel Enderby号を訪れるとき

Ahabが使った錨綱などがそれである。Ahabが片足を失ったのは、そのように予言されていたのが成就されたのだとElijahがいう。伝説では、ヤコブは、すもうの相手が、夜どうし格闘したにもかかわらず、勝てなかったために、ヤコブの股を打った。それでヤコブの股が関節からはずれてしまった、といわれている。Elijahの話では、Ahabが、ヤコブを原型にしているような類似点をもっていることになる。ヤコブの語源は、heel-godあるいはheel-holderなど、足、の意味をもっている。

Elijahは魂を第五の車輪にたとえているが、車輪の比喩は、第Ⅲ章‘Wheelbarrow’の主題にもなっているが、これは佛教の法輪や輪廻の考え方と相通じる比喩表現である。これは、聖書（『列王紀伝上』2：11）のElijahが天から迎えられて火の車に乗って昇天したことと合せて考えられるべきかもしれない。聖書のElijahは子供を死からよみがえらせたり（『列王紀伝上』17：21～22）、水浸しの燔祭と薪の上に天から火を降らせてそれらを焼きつくさせたり（同18：32～38）、水枯れと降雨の予言をしたり（同17章）、さまざまな奇蹟を行っている。彼は、Ahabの最後を予言したばかりでなく、さまざまな点でAhabとの関わりは大きい。聖書のAhabとMoby-DickのAhabが同じ名であるために、前者の運命を後者がある程度たどるだろうとインディアンの女が予言している。名前の類似性によって類似の運命が予測されるというが、原型のAhabとMoby-DickのAhabとどの点が類似しているのだろうか。原型のAhabはBoarを崇拜した罪がある。この点をのぞけば、彼はごく気の弱いおとなしい人物である。Elijahの予言を招くもととなったナボテ(Naboth)の事件もAhabの妻のジェゼベル(Jezebel)が起こしてしまったことである。もとのAhabは偶然に放たれた矢に当たってしまうが、Moby-DickのAhabも予測しない出来事で最後をむかえてしまう。この点が両方のAhabに共通する最後といえるだろう。もとのAhabが乗っていた車をサマリアの池で洗ったとき、その池の水を犬がなめたのである。この‘The Prophet’の章では、どちらかといえば、ElijahがAhabの最後をかぎつけてあとをつける犬のようにえがかれている。

### ‘The Gam’

‘The Gam’の意味は、海上で捕鯨船が他の捕鯨船と出会ったとき、たがいに乗船しあつて交歓するのを云うが、他にも意味があるので、それについて述べる。前章の‘The Albatross’で、それまでPequodについて来ていた魚が、AhabがAlbatrossに出会って白鯨について問うたとき、急にAlbatrossの方に行ってしまったが、これも、‘The Albatross’の次章の‘The Gam’につながっていく導入部分の働きをしている。一つの軌跡から他の軌跡に乗りかえたり、また二つの軌跡が接近して交わりまた離れていく、など、ちょうど、天体の、月や太陽や惑星などの合(conjunction)や衝(opposition)のような、接近や離合のような感じを受けるし、事実そのような天体用語とおもわれるような語句が使われている。例えば、Virginと出会ったとき、Ishmaelは、このように、

The predestined day arrived, and we duly met the ship Jungfrau, … (p.452)

あらかじめ宿命的に定められていた日が来て、とか、滞りなく定まった時間通りに、など、洋上で見知らぬ船に出会うには、大げさすぎる言い方をする。

海上のGamを、陸の荒野での見知らぬ旅人どうしの出会いにたとえて、Pine BarrensとSalisbury Plainについて言及がある。またFanning's IslandとKing's Millsについて言及がある。これらの地名には、比喩としての意味がある。Pineには、切望する、また古語として、悲しむ、思いわずらう、などの意味がある。Salisbury Plainは、英国南部Salisburyの北方にある起伏状高原地帯で、Stonehengeがある。Peterという名にstoneの意があるように、岩石や岩山が、この作品では、象徴としての意味があるので、それとの関連で、Stonehengeがそこにあるために、Salisbury Plainの地名が言及されていると考えることもできる。また、Plainには、(詩) 戦場、嘆き悲しむ (lament) の意がある。Barrenは、岩場を連想させ、不毛の地、荒地、である。Salisburyの語源は、armour+fortであり、やはり、砦、岩場、の意が入っている。Salisburyという地名は、Melvilleがこの作品の中でしばしば言及するCape of Good Hopeの近く、アフリカ南東部のSouthern Rhodesiaの首都の名である。Salisbury Plain in Englandは、英国南部にある白亜質の、白い岩の台地 (chalk plateau) (Feidelson) である。

Fanning's IslandとKing's Millsについては、どうであろうか。どちらも中央太平洋の島々である。また、Pequodが沈む場所に近い位置にある(Feidelsonの口絵地図参照)。Fanningの意味は、水車の翼、風車の翼、など、millと関わっている。またKing's Millsと関わっている。このKingは、前章の'The Albatross'の末尾で言及されるCycladesやIslands of King Solomonと関わっているとおもわれる。King's MillsのKingには、智者として知られるソロモンの意が入っているだろう。Millsはまた、The mills of God grinds slowly.といった諺があるように、運命の歯車、などの意があるだろう。King's MillsとFanning's Islandsは、Pequodが沈む場所をとり囲んだような形になっている(Feidelson地図参照)。また、Cycladesは、太陽神アポロの神殿のあるDelosをとり囲むようにして点在する島々である(Feidelson)。アポロと月の女神Artemisは、Delos島で生れたと伝えられ、この島は、アポロの託宣所であった。アルテミスも、予言を司る女神である。'The Gam'の前々章の'The Spirit-Spout'で述べたように、'The Spirit-Spout'の一つの主題が、結婚の秘跡についてであるが、月と太陽は、大地に恵みを与え、地球を豊穡に保つ父と母のようなものであり、その月と太陽の出生の場所とされるDelos島をCycladesがとり囲んでいる。一つの中心のまわりをぐるぐる回る、といった概念。これは、FanningやMillsから示唆されるのは云うまでもない。

円の中心に没入する、という考えは、結合、結婚、の概念に結びつくと同時に、仏教の、涅槃入り、Nirvanaの概念にも結びつく。Nirvanaには、生の炎の消滅、解脱 (final

emancipation), 入寂, 一切の煩悩から超脱した至福の境界, などの意がある。中心点を射当てるのでなければ, 周囲をどんなにぐるぐる回っても的はずれであると, Ishmaelは, 'The Gam'の前章の末尾で云っている。

…chasing such over this round globe, they either lead us on in barren mazes or midway leave us whelmed. (p.316)

丸い地球の周囲を堂々めぐりする, は, 仏教の観点からすれば, 超脱を得ることができず, 果しなく煩悩の中を輪廻する, といった意味になる。上の引用文の, barren mazesには, 'The Gam'にある Pine BarrensやSalisbury Plainなどの謎が解けるかどうか, 'The Gam'の解釈をめぐるmazeとしての, 裏の意味がかけてあるだろう。

要するに, Gamの意味は, 船がたがいに航跡を交わし合い, 情報交換をし, 親密な友誼をはかることであり, それをIshmaelはつぎのように云っているが,

…how much more natural, I say, that under such circumstances these ships should not only interchange hails, but come into still closer, more friendly and sociable contact. (p.317)

また, 海原での船と船との出会いが, まるで星空での, 太陽のまわりを回る惑星どうしの接近のように, 地上と天上での同時進行であるかのような寓意性をそなえている。つぎの文などは, そのような意味に理解できる。

And in degree, all this will hold true concerning whaling vessels crossing each other's track on the cruising ground itself, … (p.317)

For not only would they meet with all the sympathies of sailors, but likewise with all the peculiar congenialities arising from a common pursuit and mutually shared privations and perils. (p.318)

例えば, in degreeやcrossing each others trackなどは, 天体の惑星の軌道の度数などを表わす用語であると考えられる。また, sympathiesやpeculiar congenialitiesなども, ある意味では, 惑星どうしの, 調和, 感応, など, 相生や相剋の影響などを表わす語であると云えなくもない。common pursuitも, 別な解釈ができる。惑星などの天体がそれぞれ軌道や軌跡に多少の違いがあっても, みな太陽のまわりを回っている, など, あるいは古い天文の考え方では, 地球を取り巻く九天の層があって, 魂がそれらの層を天路を歷程し, 進化を重ね, 最高の天に至る, など, 中世の宇宙観が取り入れられている。Pequodは九隻の船に出会うが, それらの船が第十天へ至るためのそれぞれ段階を意味して, 経局, 最終のprimum mobileの段階へPequodが行ってしまったのではないかと考えられる。

Pequod号の航海がアルゴ船の航海を原型としてその影をとどめていることは容易に想像がつく。Pequod号とアルゴ船の著しい共通点について二三考えてみる。Jasonが追い求めた金羊毛は太陽の光に照らされて輝く雲(sun-lit cloud)であったとされており, Jason

の率いる一行は太陽の英雄たち (sun heros) (*mythology*) と呼ばれる。彼らの旅は、太陽が獣帯の十二宮に順次宿りながら移行していく動きと対応しながら、進められていく。Golden Fleeceが空に浮ぶ雲で、Moby Dickが海原を行く白い鯨であるという対比が、さらに規模が拡大されて、十二宮を旅する太陽と対比されていく。そこでは太陽が天空を渡る船にたとえられるが、『白鯨』では十二宮の旅はどのようにかたちを変えているかと云えば、それはGamと呼ばれる捕鯨船どうしの出会いとして表わされている。そしてPequod号の進行は、あるときは太陽の動きに、あるときは地球の動きに、またあるときは他のなにか惑星の動きに模されている。黄道十二宮にはそれぞれ支配星の惑星があるが、それをうかがわせるように、Pequod号が出会う船は、それぞれ火星や水星や土星などなどの惑星の、占星上の想定されている性質を帯びている。このばあい地球が宇宙の中心であるとする天動説の考え方をとるので、Pequod号が太陽を支配星とする宮に入ると考えて、Pequod号が太陽の特性をそなえた船に出会っても、なんら矛盾しないと考えたい。そっくりそのまま原型どなりに型にはめているわけではないので、ギリシア神話の型があとをとどめているといった程度に『白鯨』の筋立てを理解すればよいと思う。たとえばIshmaelは、あるときはAbrahamの私生子であるかのように、あるときはZeusの子の双子の一人Polluxであるかのように描かれているが、これを矛盾であると考えるべきではなく、Ishmaelはさまざまな普遍的な英雄の特質を矛盾なくあわせ持っていると考えるべきだろう。Pequod号が出会う船の数は、黄道十二宮の数にも、太陽と月を含めた惑星の数にも一致しているように見えないが、これには、*premum mobile*の天層数が踏襲されている。Pequod号は、Java海峡を抜け、支那海、日本沖を通り、太平洋に入ったのち、南下しながら東へ東へと進み、しだいに赤道上の東経180°に近づいていく。その途上、太平洋に入ってから、Pequod号はさまざまな船に出会い始める。このときのPequod号の進路は、23度半の傾きをもった黄道が、地球の赤道上から見た天の赤道と交角を作る軌道と一致しているものと思われる。この黄道と赤道の交点が秋分点であり、秋分点を過ぎると黄道は赤道下に沈む。黄道は海中に没するように見える。Pequod号は黄道を行く太陽の動きを模倣しているのだから、当然Pequod号は太陽を追って水中に潜ることになり、Pequod号が秋分点で水没するのは必然の結果である。黄道が太平洋上に軌跡の影を投げかけると仮定して、そのようなものは勿論存在しないが、その上をPequod号が進むようにAhabが計画しているのはいうまでもない。Ahabがそのような進路を選ぶ根拠として考えられるのは、白鯨の動きが黄道の動きと軌を一にしているはずだ、という仮定をAhabがたてていたためだろうという推定である。いうまでもなく、白鯨はMelvilleが生み出した幻想であって、形をそなえていない。しかし中世の哲学は、天上にあるものはかならず地上にも存在すると仮定していたが、その論法から導くと、太陽の性質や行動と軌を一にするものが地上に存在するはずだということになる。通常それはイエス・キリストだと考えられているが、Melvilleは、もっと具象的な白鯨という象徴が、

すくなくとも想像と精神の世界で、存在するのは必然だと思ったのではないだろうか。古くからイエス・キリストは魚にたとえられている。Ahabの考えの基底にMelvilleの考え方があらずで、AhabすなわちMelvilleであると云えなくもなく、Melvilleは象徴としての白鯨のentityとでも云えるものが論法上必然的に存在することになるとして、それを明らかにする試みが『白鯨』執筆の意図ではないかと思える。こういったことは手探りの論法であって、つぎのように云うこともできるだろう。天上にある太陽は可視のものである。地上でそれに当るのは、黄金や金貨である。黄道や天の赤道、春分点や秋分点は理論上たしかに存在するが不可視である。これら天の運行に相当するなにかが地上にも不可視的に存在するにちがいないことになり、それが象徴としての白鯨であるとMelvilleは考えたのだろう。この作品から判断するかぎり、白鯨はMelvilleにとって必然だったといえる。白鯨がもつ意味が太陽がもつ意味と同じようなものだということになれば、太陽は人間にとって、善になるときも、そうでないときもあるから、白鯨も同様に善悪を超越したものになってしまう。太陽は本質において生命を育むものであるから、白鯨も同様の方面に関与していると考えべきだろう。秋分点と交わったのち、黄道は海中に没するが、ふたたび春分点を過ぎると海上に現われ天に向う。古来より仏教では、太陽は彼岸へ橋渡しする船に見てられているが、白鯨も復活を荷う乗物ではないか。Ahabはそのような推論にもとずいて、白鯨を追い、これに乗って行こうとしたのではないか。その際、現世の肉体は捨てなければ、復活を願うことができないのは言うまでもない。この考え方はAhabが現世の快樂を否定する態度の根底にある。イエス・キリストに倣い、その復活にあずかろうとするのと同じ考え方である。

航海の途上でさまざまな船に出会うが、それを魂の発達のための遍歴とみたとて、それぞれの船は魂の進歩の一段階を示している。『白鯨』の各章を表示するCHAPTERという語も、修道会や騎士団の、徒弟の遍歴のための支部、宿、集会所などの意がある。この意図を汲むとき、MelvilleがなぜCHAPTERと頭文字で綴ったかが理解できる。章数もローマ数字で書かれていることも同じ理由による。魂の遍歴の一段階をあらわす標識であるから、軽々に小文字やアラビア数字をもって書きあらわすべきではないのだろう。その意味では、初版に忠実なFeidelson版はMelvilleの意図を忠実に伝えている。定本とされるHarrison版では、それが正しく伝えられていない。Harrison版では、Melvilleの意図がまったく見失われていると云ってよい。

Albatross号に始ってDelight号に至るまで、Pequod号の出会う船の順序にもMelvilleの深慮がうかがえる。

Pequod号は九隻の船に出会う。それらの船は、

- ① 'The Pequod meets the Albatross' (L II章)
- ② 'The Town Ho's Story' (L IV章)

- ③‘*The Pequod meets the Jeroboam*’ (LXXI章)
- ④‘*The Pequod meets the Virgin*’ (LXXXI章)
- ⑤‘*The Pequod meets the Rose Bud*’ (XC章)
- ⑥‘*The Pequod meets the Samuel Enderby*’ (C章)
- ⑦‘*The Pequod meets the Bachelor*’ (CXV章)
- ⑧‘*The Pequod meets the Rachel*’ (CXXVIII章)
- ⑨‘*The Pequod meets the Delight*’ (CXXXI章)

Pequod号の出会う船が黄道十二宮の星座やそれぞれの支配星の惑星に出会う、などという発想は、中世の錬金術の概念と当然結びついていると考えられる。『白鯨』には、ヘレニズム、ヘブライズム、その他の西洋や東洋の古来からの宗教や哲学の思想が取り入れられているので、エジプトや中世の錬金思想が組みこまれていると考えても不自然ではない。魂はそれぞれの惑星が支配する門を通して高い境地に到達すると考えられていた。太陽と月を含めて七つの惑星があり、それらの惑星はギリシア・ローマの神々であり、おのおのキリスト教の天使を従えていると考えられた。

Sun (Apollo)……Apollo……Raphael  
Moon……Diana (ローマ), Artemis (ギリシア)  
Mars……Ares……Chamael  
Mercury……Hermes……Michael  
Jupiter……Zeus……Zadkiel  
Venus……Aphrodite……Hamiel  
Saturn……Cronus……Zapkiel (*mythology*)

『白鯨』の中でしばしば言及される天使はGabrielである。惑星は天の見張番人、放浪者であると考えられた。惑星の数は太陽と月を入れて七つと考えられた。Pequod号の出会う船はその数と一致しないが、概念としては、中世の惑星観が原型であると考えられる。

土星は重く鈍い鉛の性質を持つと考えられた。Pequod号が最初に出会う船はAlbatros号であるが、この船は土星のように重く、沈黙が支配する。土星は、時間を支配するクロノスの星である。Albatros号が老人の姿をしている、など、あきらかに惑星の性質が意識して取り入れられている。

ペルシアのミトラ神秘学 (Mithra) では、天に通じる梯子があって、それには七つの金属の横棒の段がついている。この段は、門になっており、卑金属から貴金属へと上昇していく。それぞれ惑星によって守護されており、魂は、この梯子を上り下りする。七つの段はつぎのようになっている。

- ①Lead-Saturn, first world
- ②Quicksilver-Mercury, world of pre-existence

- ③Copper-Venus, heaven
- ④Tin-Jupiter, middle world
- ⑤Iron-Mars, world of births
- ⑥Silver-Moon, mansion of the blessed
- ⑦Gold-Sun, mansion of truth

この梯子は、輝く梯子、または天国へ行く星の道、と呼ばれる。Pequod号は最初にAlbatross号に出会うが、上の順序どおり、Albatross号は第一段階のfirst worldになっている。第二の船Town-Ho号が、水銀、水星、world of pre-existenceをあらわしているかどうか、これについては、‘Town Ho’s Story’の章で、またその他の船の章で、それぞれ惑星との関連について述べる。錬金術は、魂の遍歴、錬成、といった上昇の過程を問題にするばかりではない。腐蝕した金属を炉で鍛え直すと、ふたたび真新しく光輝を発つので、ここには死と再生の過程がある。『白鯨』の究極のテーマは死と再生であるが、ギリシア神話の転身物語、新旧約聖書の死と復活の寓話、その他エジプト、ペルシア、インドの宗教神話はすべて、死と再生が中心主題であり、それらをすべてMelvilleは『白鯨』の中に取り込んでいるが、単なる文章修辞として、これらをMelvilleが用いたとは思えない。古来からのこれらの伝承は『白鯨』の中での有機的に連なり、一つの大前提、つまり人間にとって永遠の主題の、死と復活を、Melvilleは問うているのである。Ahabの揺れ動く不信と確信は、復活についての不信と確信である。Melvilleは『白鯨』の中で現世の不条理をえがくのが目的ではない。錬金術の錬成の最後に到達するところの、悲しみの彼方の世界を、Melvilleは望み見ているのである。‘Gam’は中世的な錬金術の世界観を枠組みとして、死と復活の問題を探究しているといえる。

### ‘The Albatross’

この章は、前章の‘The Spirit-Spout’を承けて、それに続く章になっている。というより、‘The Spirit-Spout’は‘The Albatross’を導く章であり、これらの2章は、一続きになっている。

Albatross(信天翁、あほう鳥)は、船乗りたちの海洋語で、Goneyと云う。Albaは、Latinでは、白、の意。Albatrossは、Portugueseでは、albatross、つまりcormorant、どん欲な水鳥の意。英語で、cormorantの語源は、searaven、大海がらす、である。‘The Albatross’の前章で、sea ravenが、Pequodの後部に、群がって、とまっていた。

…while thick in our rear flew the inscrutable sea-ravens. (p.311~2)

このsea ravensは、あほうどり、のことである。Goneyという名の船は、打ち上げられたせいうちの骨のような格好の船である。

As if the waves had been fullers, this craft was bleached like the skelton of a

stranded walrus. (p.314)

ところで, walrusは, Dutchでは, whale horseである。Germanでは, walröss。Danishでは, hvalros。OEでは, horshwæl=horse whale。独語のwalrossが, whale horseであるから, rossは, horseの意である。そうすると, Albatrossにも, -rossが入っているから, あほうどり, には, 白い馬, という意味が, 入っていることになる。白い馬, といえは, 黙示録のPale horse, pale riderをおもい起す。信天翁号は, 冥界から来た船という意味になる。Goneyという語も, 語感から云って, 往きし者, といったような意が感じられる。この船が, walrusの骨のように白い, と書かれているが, たんに, 白い, ばかりではなく, walrusのように, というたとえの中に, whale horseであれ, horse whaleであれ, whaleという語が入っているところにMelvilleの配慮が感じられる。また, stranded walrusのように, “Spain—a great whale stranded on the shore of Europe” (p.15) を意識した上のものである。このようなかくれた語義の使い方をMelvilleは, dusting his old lexicons and grammars (p.3) と云っている。古い語法・語源のほこりを払う, とは, 古い語源に新しい光をあて, 新しい角度から新しい意味を見出す, と解釈できる。『白鯨』の語句は, こういった古い語源・語法の上に組み立てられて, かくれた意味をもつ, ということをもMelvilleは, 作品の冒頭のETYMOLOGYの中で, このような言葉の用い方の実例を示しながら, この作品の組織と文体を解かしている。それをMelvilleは, 文法学校への道案内, 言葉の原理への手引, USHER TO A GRAMMAR SCHOOL (p.3) と表記している。これについては, 「『白鯨』のかくれた意味と象徴」(1)で述べた。

白い信天翁には, 白鳥のイメージがある。Pequodは, St.Herena (p.309) の南を通過してしばらく経ってから, Goneyに出合っている。ギリシヤ神話のHerenaは, 大きな白鳥の卵から生れている。GoneyはHerenaとつながりがある。まず, 白鳥は, 神話では, どのような意味を象徴しているか, *Mythology*によれば,

SWAN Beauty, cloud, death, dignity, eternity, excellence, faithfulness, grace, haughtiness, mist, music, perfect discernment, poetry, prophecy, purity, snow, solitude, summer, wind, wisdom. Ability to distinguish the essential from the non-essential, the pure from the dross, because the swan supposedly separates milk from water when the two mixed. Vehicle of the soul's journey to heaven, thus resurrection.

Dream significance : (if swimming) great success; (if white) happiness, prosperity. In heraldry a learned person, lover of harmony. Sacred to Aphrodite, Apollo, Brahma, Jupiter, Leda, Orpheus, …Venus, Zeus. In Christian art typifies retirement.

Swan-drawn chariot. Aphrodite's chariot, hence bringer of beauty and love.

Also accounts for the divine heritage of man, and exemplifies the nobility of a celestial being and the greed of mankind, or the desire of man to rise to loftier realms. …air

spirits (winds) , bringers of tidings ; white swan, perfection.

白鳥は、人間界と天界をつなぐ乗物、といってもよい。Herenaの母親は、人間の女であり、父は、白鳥に身を借りたZeusであるとされている。IshmaelとQueequegは、形に影が沿うような、一卵性双生児のようなものであり、'Ramadan'で示されているように、彼ら二人は、ふたご座のPolluxとCastorにたとえられる。PolluxとCastorも母親Ledaと白鳥の姿のZeusの子である。HerenaとPolluxとCastorは、たがいに兄弟姉妹である。彼ら三人は太平洋の入口にさしかかって、いわば、再会するという恰好になっている。白鳥は、引用の説明文によるように、この世とかなたの世界をつなぐ案内人、イニシエーションなどの意味がある。彼ら三人にとって、白鳥は、父Zeusである。Albatrossは、帆柱も索具も白く、霜古りた白髪でおおわれた樹木のようなのである。このhoar-frostは、神を老人の姿にたとえたときの白髪のイメージをあらわす。これは、また、聖書から引かれた、つぎの文と対応し合っている。

“Leviathan maketh a path to shine after him; One would think the deep to be hoary.”

Job. (p.9)

Zeusが白髪をしているとは考えられないが、要するに、神=老人、と、白鳥、白鯨、骨(せいうちの)、死、など、白の概念とAlbatrossは結びついている。見張りに立っている船乗りたちは、長いあごひげをつけ、ボロ布のような動物の毛皮をまとっている。この世の者のようには見えない姿をしている。彼らは、信天翁を擬人化したような姿をしている。

白鳥があるいは信天翁がイニシエーションを導いているとして、一体どんな世界へ導こうとしているのか。Coleridgeの*Ancient Mariner*でも、Albatrossやsea snakeが、ある世界へ導いたり、そこから救い出す、など象徴としての働きをしていた。Albatrossの特色を文中から拾ってみよう。三人の檣頭の見張りたちは、帆柱に針で打ちつけた鉄の輪の中に立っている。

Standing in iron hoops nailed to the mast, they swayed and swung over a fathomless sea; and though, when the ship slowly glided close under our stern, we six men in the air came so nigh to each other that we might almost have leaped from the mast heads of one ship to those of the other ; (p.314)

この丸い鉄の輪に呼応するものとして、Ahabは、

“...Ahoy there ! This the Pequod, bound round the world ! Tell them to adress all future letters to the Pacific ocean !” (p.315)

という。Ahabは、つぎのように、round the world、と、ふたたび云う。round the worldは都合3回繰り返されている。

he cried out in his old lion voice,—

“Up helm ! Keep her off round the world !” (p.315)

それを、またIshmaelが、受けて、Round the world! (p.315) とは何だろうか、と問い、みづから説明する。世界を回る、つまり、この地球をぐるりと回って周航する、というのを、Albatrossの見張りたちが立っている丸い鉄輪が象徴している。丸い鉄輪を地球をとりまく帯だとすると、Ishmaelも云うように、行けども行けども、ぐるぐる回りをするばかりである。この堂々めぐり (circumnavigation) を、どうしたものか。しかし、Ishmaelの説明には、この円環運動のきづなを断ち切る方法を見つけるのが至難のわざであると危惧した上で、それから脱出する方法があることが示唆されている。Ishmaelは、云う。

Round the world ! There is much in that sound to inspire proud feelings; but whereto does all that circumnavigation conduct? Only through numberless perils to the very point whence we started, where those that we left behind secure, were all the time before us. (p.315)

結局、最初の出発地に戻ってくることになってしまうか、それとも、地球が丸くなく限りなく平面になっているなら、楽園を発見する可能性がなきにしもあらずであろうが、途中で道に迷ったり、挫折するだろう、と云って、Ishmaelが彼の悲観論を述べている、と見るのが、表面的な、この章の要旨であろう。

Ishmaelが続けて話しているつぎの文では、

Were this world an endless plain, and by sailing eastward we could for ever reach new distances, and discover sights more sweet and strange than any Cyclades or Islands of King Solomon, then there were promise in the voyage.

But in pursuit of that demon phantom that, some time or other, swims before all human hearts; while chasing such over this round globe, they either lead us on in barren mazes or midway leave us behind. (p.136)

もし東へ東へ限りなく航海して行けば、とIshmaelは云う。これは、太陽の方向へ進む、あるいは太陽に限りなく近づくとして、の意である。Cycladesは、太陽神であるアポロの神殿のある場所である。Delos島を中心とするエーゲ海南部のギリシアの群島である。Islands of King Solomonは、人間がなり得た最高の智恵者として、また最高の富の所有者としてのソロモンの名を借りた島である。ソロモンが神殿を建てたことも含めているだろう。もし地球が天動説にもとづくものであれば、東へ無限に進めば、太陽の昇る場所、天門と云える場所に限りなく近づくだろう。そうすれば、その方向に進めば希望があるだろう。しかし、われわれが夢み望んでいる、はるかなる神秘のかずかず、すべての人の心の中を、ふとした時に、脳裡をかすめるように泳ぐ、あのphantom of life、身を焦しながら悩ましく、それを追い求める航海において、結局、道に迷うのがおちである、とIshmaelは云う。far mysteriesとは、何だろうか。すべての人の心の中を泳ぐというdemon phantomとは、何だろうか。Ishmaelの云う、ぐるぐる回り、とは、距離的なものだけではない。地球

が丸ければ、地球上をどこまで進んでも太陽に近づくことができない。chasing such over this round globe のsuchは、形としては、太陽をさしているだろう。距離とか、目に見える太陽とかは、たとえとして、形をかりた表象にすぎず、そういった形を借りて象徴されている精神は何かと云えば、たとえば、仏教などでいう輪廻や煩惱、カルマなどを含んでいるのではないだろうか。Melvilleが'Buddah'という詩の中で、Nirvana (涅槃) について書いているのは知られていることである。'The Albatross'の章で、Ahabがライオンのような声で叫ぶ、he cried out in his old lion voiceは、仏教の経典で、しばしば、釈尊の説法を意味して使われる、獅子吼、をさしているのではないだろうか。those far mysteriesは、死と復活、解脱や涅槃、をさしているのではないだろうか。仏教では、ぐるぐる回り、とは、果しなく、生れては死に、生れては死に、をくり返えし、天界に帰ることができないのを云う。Melvilleがどの程度こういったことを考えていたかわからない。ただ、涅槃入りするには、特別の方法、つまり秘法があると考えていたらしいこと、それを象徴的に、矢が的を射る、といった比喩であらわし、『白鯨』の主題に取り入れているのではないか。西洋にも古くから、vorticismとして知られるそのような思想があるので、いずれとも断定はできないが、Melvilleが仏教思想の影響を受けているのは事実である。

*'Buddha'*

*'For what is your life? It is even a vapour that appeareth for a little time and then vanisheth away?'*

Swooning swim to less and less,  
Aspirant to nothingness!  
Sobs of the worlds, and dole of kinds  
That dumb endures be—  
Nirvana! absorb us in your skies,  
Annul us into thee.

この詩では、渦の真中に飛びこんで、無 (nothingness) になり、仏陀の空の中に溶けこむのが、カルマの業苦 (生老病死などの) を離れるのが、解脱であろうか、それが涅槃であろうか、そうなってほしい、とMelvilleは云っている。それが、'Albatross'の章とどのような関係があるかと云えば、まず、those far mysteriesが、仏教の涅槃をふくめた、死と復活の秘儀をさしているのではなからうか、ということ、それから、つぎのような文中の示唆と、それらが関係があるように思われるのである。

はじめにあげた引用文に、AlbatrossがゆっくりとPequodの船尾に近づいて来たとき、両方の船の帆柱にいた見張りの役の三人と三人が、空中で、あまり近くに寄りすぎて、たがいに飛び移れば、相手側の船に場所を交換できるぐらいであった、と述べられている。

もう一つは、同じように、今までPequodにつき従っていた海の生物と空の信天翁の群が

Albatrossへと場所を移動したことである。Ahabが、これから太平洋へ行く、と云うと、すぐさま、そのような変化が起ったことである。

At that moment the two wakes were fairly crossed, and instantly, then, in accordance with their singular ways, shoals of small harmless fish, that for some days before had been placidly swimming by our side, darted away with what seemed shuddering fins, and ranged themselves fore and aft with the stranger's flanks. (p.315)

Pequodが、round the worldとって、一つの丸い軌道の上を走っているとすると、Albatrossも一つの他の軌道の上を走っていることになる。二つの軌道が、あるとき一点で、一瞬間接し、ふたたび離れていく。これは、何を象徴しているのだろうか。たとえば、こんなふうには考えられないだろうか。一つの軌道から他の軌道へ乗り換える。そうすることによって、堂々めぐりから脱出する。それらの軌道は、一つは、地球の赤道が天球に映し出すと考えられた地平線の帯、他方は、いうまでもなく、地球から見た太陽の通る道、黄道である。黄道と赤道が交る点は、2箇所ある。春分点と秋分点である。秋分点は、海上にあって、いわゆる日付変更線として知られている。ここは、すでに述べたように、天門・地門・冥門として、使徒ペテロが鍵を持ち守っている場所にちがいない。Ahabが問題にしているのは、この場所である。この場所で、太陽と地平線が一年に一度交るので、地球の帯から脱出して、太陽の軌道に乗り換える、これが、ぐるぐる回りから脱出する方法であると、Ahabは考えているらしい。Ahabが、bound round the world、といい、Ishmaelが、chasing such over this round globeというのは、Pequodが、太平洋に入り、地球をぐるぐる取り巻く赤道帯の上を走って、秋分点に近づくのを意味している。黄道に乗り移るためには、いうまでもなく、mortalな部分はすべて捨て去らなければならない。太陽が、地平線の下、海の中へ沈んでいく、いわゆる太陽の死と云われる現象と運命をともしめるためには、Ahabと一行は、秋分点で死ななければならない。そうでなければ、太陽の中に入り、太陽と一体になって復活し、永生の世界に入ることができない。Ahabが求めているのが太陽の世界であるのは、引用文の、

by sailing eastward we could for ever reach new distances, and discover sights more sweet and strange than any Cyclades or Island of King Solomon, then there were promise in the voyage.

から、理解できる。Islands of King Solomonは、南太平洋の秋分点周辺の群島の一つである。ソロモンの知恵と富でもってしても得ることができなかつたものは、太陽であり、また、その属性である復活と永遠の生命である。

聖ペテロが三界の門の守護者であるという考え方は、おそらく、ローマ帝国の時代に入ってから現われたものであろうが、この考え方に従うと、三界の入口は、同一場所にあることになり、地球が球体であるという前提がなければ成り立たない。また、近世の、日付

変更線、のような概念がなければ、成り立たない。すでに早くからプトレミーの考え方などに、球体の概念があったのだろう。同様に、聖母マリア伝説の中に、マリアが昇天するとき、彼女は衣服の帯を解いて、それを地上に残していった、というのがある。これなどは、見渡すかぎり水以外なにもない海上で周囲を見ると、人は、自分が水平線の環で取り囲まれているのを見るだろうが、これを地球を取り巻く帯、聖母マリアの衣服の帯と見たてたのかもしれない。また、Albatrossの檣頭に、鉄の環 (iron hoop) が釘で打ち付けてあり、そこに見張人が立っているのは、このような、地球の帯、天球の帯、の中に取り囲まれているという意味もあるだろう。Albatrossの船体には、鉄錆の赤いすじが水路のように走っている。それは、力士が腰に締める回しのように見えたかもしれない。Pequodは、象牙のきばのような鯨の骨を、船体のまわりにつけている。Pequodのばあいは、象牙の塔、象牙の門のつもりだろう。それは、象牙の門が夢の門であるとされており、Ishmaelが云うように、

…in pursuit of those far mysteries we dream of or in tormented chase of that, some time or other, swims of all human heart:

Pequodが、すべての人の深層意識の中にある超脱の願望を、そして、それを象徴し、一片の雲のように泳ぐ白鯨を探求する夢の門であることを示している。この考えを支える比喩が、'Albatross'の次章の、'The Gam'にあるので、すでに述べた'The Gam'の項を参照せよ。

Pequodは、Cape of Good Hopeを越えたのち、南東の方向に、太平洋に向って、また赤道にむかって進んで行く。*Michaelmas*の頃に、秋分点に着くためである。聖ミカエル祭は、9月29日で、この日は、すべての聖者のための祝日で、収穫を祝う。Ahabは、太平洋へ行く、とAlbatrossに告げる。The Pacificという語は、字義どうりには、平和の海、また頭文字で綴られているために、平和という概念そのもの、絶対の平安、涅槃、などを表現していると考えられる。Pequodは、都合9隻の船に出合うが、その最初の船が、Albatrossである。Albatrossは、この世ではない別の世界からの使者・案内者として、沈黙をもって、象徴的な姿や現象によって、メッセージを雄弁に伝えている。船が接近しそうになったり、Ahabが白鯨についてたずねるや、風向きが変わったり、魚や鳥がPequodから離れていくなど、人為的な働きによるものではないので、Pequodが超自然の力によって導かれ、劇が進行していくことの認識が、Ahabの心に、必然、宿命、旅の最後の結末、そのあとの願望の成就、などについての確信を与えていると見るべきだろう。Ahabは、さまざまな現象の中に示されるサインを読みとっていく。彼の姿勢は、

Though in the course of his continual voyagings Ahab must often before have noticed a similar sight, yet, to any monomaniac man, the veriest trifles capriciously carry meanings. (p.315)

monomaniacであると、しばしば表現されているが、かならずしもこの語を否定的な意味に解釈するべきでない。一事に熱中する、など、良い意味に取って差し支えないと思う。Albatrossの、skeltonのようなspectral appearance、白、老人、沈黙、などのしるしによって、Ahabは死の運命が避けられないのを知る。Cape of Good Hopeは、太平洋（このばあい涅槃にあたるとして）に入る関門である。この門をくぐり、第一の船Albatrossに会って、Ahabは、deep helpless sadmss (p.315)を感じるが、同時に彼は、この岬が、希望の門、であることの意味を、逆説的に、重くみているにちがいない。Albatrossの白のイメージは、fullers (p.314)（毛織物を洗ったり蒸したりして生地を密にし白くする布さらし屋）のような波によって、白くされた衣服のようである。罪を洗われて白くなった魂のようである。最初に引用した、白鳥が象徴する意味を、Albatrossはもっていることになる。美、雲、死、威厳、永遠、卓越、篤信、予言、完全な識別力、知恵、天界へ行く魂の乗物、復活、大成功、幸福、繁栄、高い段階へ上りたい欲求、良い知らせを伝えるもの、完成、など、いずれも‘Albatross’の内容にあてはまると云える。

### ‘The Streets’

捕鯨志願の田舎者たちの姿が、こっけいにえがかれている。彼らは、green VermontersやNew Hampshire men (p.60)である。Vermontには、Green Mountainsが、New Hampshireには、White Mountainsがある。Bulkingtonは、VirginiaのAlleghanian Ridge出身の Southerner (p.41)である。Rockaway Beach (p.25)も、岩の意が強調されているのは、いうまでもない。Virginiaには、Blue Ridgeがある。Green MountainsとWhite Mountainsは、南北にほぼ平行に並んでいて、緯度は、Blue Ridgeより、はるかに北寄りである。Green MountainsとWhite Mountainsは、地図上でみると、二本の門柱のように見える。捕鯨の志願者たちは、二本の柱のあいだの通路を通して、New Bedfordにでかけてくる。彼らの頬は、Green MountainsやWhite Mountainsさながらに青々としているか、または、日焼けに染まらず、まだ白いかのどちらかである。彼等の服装ときたら、とんちんかんで、田舎の伊達な兄ちゃん<sup>あん</sup>まるだしである。

…you should see the comical things he (a downright country bumpkin dandy) does upon reaching the seaport. In bespeaking his sea-outfit, he orders bell-buttons to his waistcoats; straps to his canvas trowsers. Oh, poor Hay-Seed! how bitterly will burst those straps in the first howling gale, when thou art driven, straps, buttons, and all, down the throat of the tempest. (p.61)

この文には、かくれた意味がある。bell-buttonは、鈴形ボタン、のほかに、bellには、鐘状花、の意が、またbuttonには、木の芽、つぼみ、などの意がある。buttonには“Boutton de Rose,”—Rose-button, or Rose-bud (p.517)のように、花のつぼみ、の意がある。胴着

のまわりにつけた鈴は、Pipのタンバリンの鈴を連想させるし、また、Pipの鈴は、連想が拡大されて、夜空の地平線の上に輝く星のように見えるが、これらは、bellの語が与える一連の心象である。strapには、革紐、と、little tongueまたはliguleの意がある。ligule(ligula pl.)は、舌状のイネ科の植物、の意がある。また、Ah, poor Hay-Seed!のHay-Seedには、田舎者、と、落ち穂についている種もみ、の意がある。これらの語は、豊穰、を意味し、捕鯨志願者たちが植物の種子であるかのような陰喩が含まれている。Cape Hornが、豊穰の表象になっているのだが、同時に、植物の種子が風に吹きとばされる風景が、鯨の汐吹きのとばしるさまと重ね合わせられているのである。

イネ科の種子は、また、聖餐のためのパン、へ連想が拡大されていく。New Bedfordは、land of oilであるがcornとwineの地ではない、とIshmaelは云うが、Queequegが偶像にビスケットを供えた(p.50)ことや、unaccountable farrago of the landlord's (p.44)のfarragoには、ごたまぜ、やcorn, wheatの意があるなど、この男達が聖餐のパンになる、という供儀としての意が含まれていることになる。Ishmaelは、鋸打ちのNathan Swain(p.37)について言及するが、Nathanは、Gift of Good, の意であり、また、Swainは、田舎の伊達男、の意である。New-Bedfordの街路を歩く田舎の伊達男の服装には、かくれた意味があることがわかる。彼らが着ている燕尾服(swallow-tailed coat p.60)や厚毛上衣(bombazine cloak)は、海狸帽(beaver hat)、水夫帯(sailor-belt)、鞘刀(sheath-knife)や暴風帽(sou'wester)と釣り合わず、こっけいに見えるかもしれない。swallow-tailは、鯨の尾に似ているのと、吸いこむ、引き入れる、など鯨にかかわる連想を与える。また、bombazineは、黒布地で、喪服などにつかわれた。beaver hatはcastorとも呼ばれ、castorは、滑車などの車輪や重い荷を運ぶための脚輪、の意である。車輪も、MOBY-DICKでしばしばつかわれている表象である。時や循環をあらわす。sailor-beltであるが、beltは、海洋上で船をとりまく地平線の円い帯、または、地球をとりまく赤道帯、などの意味をもつ。sheath-knifeのsheathには、おおう、包む、箱に入れる、石積みの堤防、などgraveの意がある。sou'wester、南西の方位をさす。Cape Hornは、New Bedfordから南西の方位にある。彼らが身につけている装束は、なんらかの意味で、秘儀めいている。

New Bedfordの町は、New Englandの中でも、もっとも快適な住宅地である、とIshmaelはいう。

New Bedford is a queer place. Had it not been for us whalemens, that tract of land would this day perhaps have been in as howling condition as the coast of Labrador. As it is, parts of her back country are enough to frighten one, they look so bony. The town itself is perhaps the dearest place to live in, in all New England. It is a land of oil, true enough; but not like Canaan; a land, also, of corn and wine. The streets do not run with milk; nor in the spring-time do they pave them with fresh eggs. Yet, in spite of this,

nowhere in all America will you find more patrician-like houses; parks and gardens more opulent, than in New Bedford. Whence came they? how planted upon this once scraggy scoria of a country? (p.61)

New Bedfordは、かつては骨ばった石ころだらけの、寒々とした土地だった。これは、これまで述べてきたような、岩、墓地、などの意味をこめてNew Bedfordを眺めたものである。この地から、樹木の茂る公園と庭園が生れ、立派な家が立ち並ぶ。公園と庭園、には墓地の連想とともに楽園の連想がともなう。樹木の茂る(opulent)と立派な家々(patrician houses)には象徴的な意味がかかっている。patricianには、of noble rankまたは、父祖たちの、などの意味がある。of noble rankは、高い段階の精神の高貴さ、を意味することができる。houseは、魂の住まい、の意味にとることができる。opulentには、田舎の伊達男たちが、鐘状の花や麦の穂がこぼれんばかりに実るように、街路にははなやかにみちあふれるさまと、楓が緑と黄金色に輝き、はしばみの茂みが、燭台形にまっすぐにのびた鈴なりの花房で人々の眼をたのしませるさまをあらわしている。

In summer time, the town is sweet to see; full of fine maples—long avenues of green and gold. And in August, high in air, the beautiful and bountiful horse-chestnuts, candelabra-wise, proffer the passer-by their tapering upright cones of congregated blossoms. So omnipotent is art; which in many a district of New Bedford has superinduced bright terraces of flowers upon the barren refuse rocks thrown aside at creations final day. (p.62)

街路樹の茂るさまは、この世のものとおもえない光輝と尊厳にみちている。Augustにふくまれている、神々しい、の意が生かされている。congregated blossomsは、魂が花開いたようである。その巧みさは、全能の神のわざomnipotentによる。その神の力が、創造の最後の日に打ち捨てられた岩だなの上に、花の輝きsuperinducedをもたせさせた。horse-chestnutsのchestnutsは、生命の木として表象されている。Chestnut通り(p.59)や、田舎の伊達男たちのかぶるbeaver-hatがcastorとも呼ばれ、castorにchestnutの意があるなど、またchestnutの樹一面に白い小さな花が咲いて、樹は、白い花粉をまぶしたようになるなど、chestnutの樹の象徴はあきらかである。疾風が咆えて、そんなポタンや革紐なんぞ嵐のあぎとにほうりこまれて見たまえ、たちまち革紐なんか吹きとんでしまうぜ(p.61)は、Chestnutの白い花が咲きこぼれる光景と一致する。田舎の伊達男たち、の田舎は、Chestnutの生えている楽園の風景でもある。

Chestnutの白い花は、伊達男たちの命が咲く、のであって、そのためには、彼らは鯨のあぎとの中に、まえもって肉体の命を捨てなければならない。chestnutは、chest+nutである。chestは、箱、胸、coffinなど、すでに見てきたように、肉体や死の表象である。しかしchestは、箱船、櫃、など、魂を彼岸に運ぶ乗り物、や、宝の小箱、などの表象でもあ

る。BroadwayやChestnut通りは、大きい港の、船渠に近い街路なら、どこにでもある(p. 59)、とのべられているが、BroadwayやChestnut通りには、楽園へ行く道があることが示唆しており、そこは、死を通過しなければ行くことができない。chestnutのnutは、木の実、種、核、あるいは肉体の内なるところに内蔵されている生命の根元、生命の原動力、とでもいうべき、魂の原子核のことであろう。この核が、楽園に生えている生命の木の種子なのである。人はみな、この種子を内蔵しているのである。伊達男たちが身につけている革紐は、穀物や樹木の種子を象徴している。これは、生命の豊穰を示す表象である。Chestnutの樹が一面に白い花でおおわれるさまは、抹香鯨の潮吹きがあたり一面に飛沫と霧を散らせるのと相似ている。抹香鯨の潮吹きが、Spermの放出のイメージと重なりあうのは、いうまでもない。milk…fresh eggs (p.61)にも生殖のイメージがある。

horse-chestnutのhorseには、ものを掛ける台、中石（鉱脈の中にある岩壁と同じ岩）などの意がある。前出のhorse-collar (p.54)にも、同じように、軛、台、しゃれこうべの軛、などの連想を呼び起すものがある。この構図はQueequegが、かつら下としてしゃれこうべを散髪屋に売り払ったことに続いていく。horse-chestnutのhorseは、岩の台、として一連の岩の比喩に続くものである。

opuletには、魂が復活して花を咲かせ、永遠の夏を楽しんでいる、など、死を通過して彼の地の王国で生命の樹につながり繁るさま、がふくまれている。花のようにあでやかな捕鯨志願の田舎者たち、彼らは、捕鯨という騎士道の騎士や従者たちである。捕鯨そのものが、秘儀である。彼らは、生命とは何か、道とは何か、を求めて旅に出るのである。しかしNew Bedfordのはなやいだ田舎者たちのむれや、夏に輝く街路樹の並木、は出発地点ですでに帰結点での結実が約束されているかのように見える。鋸打ちのNathan Swain(神の贈物、田舎の伊達男、の意)の名が、航海の結果を象徴している。MOBY-DICKは、Nathaniel Hawthorneに捧げられているが、この名前にも、作品の主題が、碑銘のように象徴されている。それは、Nathanielが神の贈物、Hawthorneがヒースの咲く荒地、であるからだ。荒地とは、New Bedfordが象徴するところのものごとである。荒地とは、いうまでもなく、矛盾する両面性質をもつ。それは、不毛と復活である。復活は、キリスト教の論理では不毛の中からこそ可能だからである。荒地は、帰結点であり出発点である。それは、Bouton de Rose、ばらのつぼみ、汚穢の中から生じる芳淳、Josephの杖に咲くばらのつぼみ、墓石の中からのLazarusの復活、しゃれこうべの丘からのJesusの復活、など、荒地は、永遠の生命の発祥地である。New Bedfordは、生命探求の出発点としての象意をもつ。New Bedfordは、存在を認識するための出発点となっている。

上にあげた文で、Ishmaelは、New Bedfordは、不思議な(queer)場所である、という。New Bedfordは、かつてNew Englandでもっとも荒涼の土地であったが、もっとも快適な住宅地になった、など最上級で表現されている理由は、New Bedfordに形而上の意味

がこめられているためである。春にはNew Bedfordの街路に牛乳が流れたり卵で街がしきつめられたりすることはないが、といいながら、Ishmaelは、New Bedfordと対比してCanaanの地について言及している。これは、New Bedfordこそ新しいCanaanである、とのIshmaelの自負のあらわれである。New Bedfordに咲く女たちが紅ばらのようにかぐわしい、また、この街にあふれる若者たちが樹木であり、樹に結実する花である、とってIshmaelは、人間こそ樹木であり、その上に咲く花である、生命の樹は人間の中に生育する、と示唆する。New Bedfordの礎石は、ごつごつした火山岩滓(once scraggy scoria of a country)である。くりかえし出てくる火山岩の比喩は、復活を暗示したものであることはいうまでもないが、ここで云われる火山岩は、創造の日に取りかたづけられ捨てられた岩、Lazarusが枕にした敷石(p.34)などをふくむものであり、それらの岩はすべて復活にあづかるための前提となっている。しかし、岩や家々や樹木や花は、比喩や象徴であって、岩や家や植物そのものに意味があるのではない。人がみずからをそれらの象徴に同化させ、みずからがそれらの象徴になりかわるところに意義がある。人みずからが荒地の岩であることを認識し、やがて紅ばらが象徴するものに変容するのをねがうところに、復活にあづかるという意義がある。人はみずからがNathan SwainやNathaniel Hawthorneであると見透すことが、みずからの変容のための前提条件になるといえるだろう。復活を成就させるための条件はすべて、人の内面にととのっていることになる。みずからの肉体を媒体として、肉体の内面を掘り起こすことによって、復活も解脱も永遠の生命も、得ることが可能になるのだろう。New Bedfordの紅ばらも、Queequegも、Ishmaelも、Ahabも、Cape Hornも、白鯨も、すべての表象や象徴を重層的に重ね合わせて内面の視覚の中で串ざしにし、みずからをそれらの象徴の中に溶けこませ、瞑想の海の中に通い路と突破口を見つける、そういった構図が、この作品全体が意図するところのものである。多くのCounterpaneが、一つに重ね合せられ、piercing eyeによって突き通されて、眼前を、その串の同心円軸を中心に星辰のようにぐるぐる回転する。すべてが重ね合せられているのである。それが、この作品の構図である。

New Bedfordの町とRose of Sharonが重ね合せられている。

And the women of New Bedford, they bloom like their own red roses. But roses only bloom in summer, whereas the fine carnation of their cheeks is perennial as sunlight in the seventh heavens. Elsewhere match that bloom of theirs, ye cannot, save in Salem, where they tell me the young girls breathe such musk, their sailor sweethearts smell them miles off shore, as though they were drawing nigh the odorous Moluccas instead of the Puritan sands. (p.62)

New Bedfordの女たちは、その地のばらのように匂う (like their own roses) は、女たち自身がばらであるかのように、という印象を与える。the fine carnation of their cheeks

is perennial as sunlight in the seventh heavens のcarnationには、fleshの意があり、perennialには、多年生の、永遠の、などの意がある。the seventh heavensは、天使と人間がともに住む最高天とされているから、また、Canaanの地にたとえられたりして、New Bedfordが、荒野から楽園に変貌した情景がえがかれている。New Bedfordに匹敵する土地はSalemだけである、の理由として考えられるのは、Salemは、Jerusalemの雅語であること、Salemの語源は、peace, shalom (Gen. 14:18) であること、New BedfordがRose of Sharonにたとえられていることなどによる。Salemは、Salome (<Shalom) と語源が同じである。Salomeと洗礼者Johnとのかかわりからあきらかなように、ここにも、しゃれこうべの喩えがかくされているとみなすことができる。Salemの乙女たちの息はじゃこうのように匂う、とあるのは、わが国でsperm whaleを抹香鯨またはじゃこう鯨と呼んでいるように、sperm whaleがじゃこうのように匂う、が掛けられている。

ここで、ばらの花の象徴について考えてみなければならない。古来、しばしば、宗教的に成就の状態は、花が咲く、という表象であらわされてきた。キリストは、ばらのつぼみに、また、仏教では、釈尊の説く理想は、蓮花に、たとえられてきた。Josephの杖に咲いた花は、ばらにたとえられていて、やがて十字架の上に咲くばら、キリストの出現を予兆している。洗礼者Johnのしゃれこうべも、十字架の上に咲く赤いばらの原型であろう。十字架上のキリストは、中世以後、ヨーロッパでは、ばら十字 (Rosencreuz) と呼ばれて、これは、秘跡としての色彩の濃い表象である。第XCI章 'The Pequod Meets the Rose Bud' は、ばら十字の象徴である。帆柱を十字架にみたてて、そこにむらがる赤い帽子をかぶった乗組員たち、この光景は、はしばみの樹が、枝もたわわに、燭台の灯火のような花実 (cone) を結んでいるさまと、二重写しになっている。

十字架は、キリスト教の本質を象徴している。十字架の横梁は、地平線の表象である。地平線は天と地を隔てて、両者のあいだに越えがたい一線を画している。行けども行けども、地平線は目の前に立ちふさがって、人は地平線の彼方に行くことができない。地から天へ上昇するためには、なんらかの橋渡し、宥和、が必要である。十字架の縦柱は、天と地をつなぐ架け橋である。キリストが、わたしは道である、命である、と説く理由は、十字架が構成する十字形の垂直線を通らなければ、天に昇ること、つまり永遠の生命を得ること、は不可能であるためである。キリストは、十字架の交点に咲く花である。また、十字架は、しゃれこうべを掛ける台である。horse-chestnutのhorseには、ものを掛ける台、の意があった。horse-chestnutは、十字架を意味しているとおもわれる。捕鯨志願者たちがかぶっているbeaver-hatは、castorとも呼ばれ、castorにはchestnutの意がある、とすでに述べた。chestnutの寓意がさらにもう一つある。それは、New Bedfordでは夜ごとに身の丈ほどもある鯨脳油ろうそくを燃やしつづける。every night (they) recklessly burn their length in spermaceti candles (p.62)。彼ら自身が、等身大の鯨脳油のろうそくとなって、

燃えるように感じられる。はしばみの木が、美しく、枝もたわわに、燭台のように、先の尖った真直にのびた円錐形の、花房から毬果 (cone=nut) を、道行く人に、捧げるように差し出している (proffer)。等身大のろうそくと、燭台形のchestnutの樹と、New Bedfordという名の岩だなの上に住む人、とが同一のものであるかのように、おかれている。

輝く婚礼が見たければ、New Bedfordに行かねばならない。You must go to New Bedford to see a brilliant wedding. (p.61)。これは、具体例としては、IshmaelとQueequegの床入りの儀式をさしている。New Bedfordという名の寝台の上で一度死に、そこからふたたび復活する。そればかりではない。IshmaelとQueequegは同性であるから、非生産的である。しかしキリスト教的論理では、New Bedfordの岩だなに紅ばらが咲くように、不毛は、豊穡の裏がえしである。物質の生産が不可能である代償として、精神の生産は可能だろう。IshmaelとQueequegのみならず、Ahabも婚礼の儀式らしくおもわれる通過儀礼を経験する。これについては、拙稿の第XXXI章‘Queen Mab’と第C章‘Samuel Enderby’を参照願いたい。Ishmaelは、Queequegが帰ってくるまえに、一人で休もうと試みて、結局、寝心地がわるくてやめてしまう。なにかを生み出し、変革を試みるばあい、単一の力をもってしては無理だということだろう。正と反の要素が結びついて、合の状態を創り出す、または、陽因子と陰因子が働いて均衡・安定の状態を作り出すなど、原理的には、二つの要素が必要であろうことはうなずける。IshmaelとQueequegは、大きく似ているが、全く対称的な性格である。二つの要素を結びつけるのを、結婚と表現すればわかりやすい。錬金術の原理と似ている。一つのものから、化合物は作れない。婚姻を秘儀と理解して、修道僧・修道尼は、キリストの花嫁になると、誓うのである。これは、キリストと一つになることによって、変容をねがっているのである。IshmaelとQueequegのばあいにあてはまるとはいえないけれども、二人の寝台儀礼は、合一によって安定の状態をつくりだすことをねがった儀式であろう。New Bedfordの伊達男たちと乙女たち、彼らは、紅ばらやchestnutの樹とそのnutにたとえられているが、両者の根底には、婚姻という概念である。伊達男たちと乙女たちは、第LXXXI章 ‘The Pequod Meets the Virgin’と第CXV章 ‘The Pequod Meets the Bachelor’で、とりあつかわれるが、これら二章にかぎらず、婚姻は、この作品のかくれた主要なテーマである。sperm whaleのかたちや名称が、婚姻の概念の表象である。しかし、婚姻は、この作品では、秘跡としての意味にかぎられている。

Go and gaze upon the iron emblematical harpoons round yonder lofty mansion, and your question will be answered. Yes; all these brave houses and flowery gardens came from the Atlantic, Pacific, and Indian oceans. One and all, they were harpooned and dragged up hither from the bottom of the sea. (p.61)

かなたに高くそびえる邸宅 (yonder lofty mansion) とそのまわりにはりめぐらされた紋章のような錨をみよ、そうすればすべての疑問は解けるだろうと、Ishmaelは云う。高く

そびえる邸宅とは、聖書で、岩の上に家を建てよ、と説かれているような、純粹に靈的なものが、この語にかくされている。肉体を媒体として、魂が築く建築物のことである。この邸宅のまわりには、ローマの兵士たちがキリストにとどめをさした槍のような鉋が、とりまいている。これらの雄々しい家々 (brave houses) と花咲き匂う園 (flowery garden) の意味もあきらかであろう。受難像と鯨が重なり合い、海中から復活してきた人々の魂が宿る楽園であるように Nantucket がえがかれている。花咲き匂う楽園は、墓地が変貌したものである。yonder lofty mansion の yonder は、彼岸をさしており lofty は、天国をさしていると云えるだろう。

この寓意を解けば疑問が氷解するだろう、とは、つぎの理由による。この作品の物語の結末では、Ishmael を残して、全員、Pequod 号が巻きおこす渦とともに、海底に吸いこまれてしまう。彼らは、何のために、これまで努力し、どこへ行ってしまったのだろうか、という疑問が残る。その疑問が、これで氷解するだろう、といているのである。彼らが、海底から、花咲く New Bedford にひきずってこられて、彼らの魂の立派な邸宅を見出すかのようにえがかれている。ちょうど、手袋を裏がえすように、もう一つの新しい世界があるかのように、あるいは、トンネルのむこうに、新しい世界があるかのようなのである、といってもよいだろう。死とは、トンネルのようなもの、通路のようなもの、海の底をつきぬけるようなもの、と考えればよいだろう。人の内面にも海があるなら、海の表面は、意識界だろう。その下に潜在意識があるとすると、潜在意識の底をつきやぶれば、他界の生命の海があるかもしれない。此岸と彼岸は、内面の海の底を境界線にして、逆むきに接し合っているかもしれない。ちょうど、水に映る投影と岸辺の景色のように。そのように考えれば Narcissus が水面にうつる自分の投影に恋いこがれる寓話には、深い意味があると Ishmael がいうのが理解できるだろう。

これらの立派な家々と花咲く園は、大西洋、太平洋とインド洋から New Bedford にやってきた。New Bedford の繁栄は、鉋を打ちこんで海底からひきずってこられたが、それは大西洋、太平洋とインド洋の海底からである。深き淵より上げられるのは、Jonah の主題であるが、New Bedford も、引き上げられて到達するところの比喩、としての意味がある。太平洋、大西洋とインド洋も比喩としての意味がつよい。太平洋については、第 CXI 章 'The Pacific' で、さらに語られることになる。太平洋は、peace を象徴している。Melville は、渦の中心に平和があると考えていたようである。渦も、この作品の主要な表象の一つで、平和への、入口、通路、の意をもつ。そのため、太平洋は、仏教でいう涅槃、寂滅などの概念を象徴している。紅ばらによって Rose of Sharon や Canaan の地を、また Salem の地名によって Jerusalem (= Shalom = peace) を、というふうに、これらの語によって呼びおこされる中心概念は、peace である。

大西洋という語からも、同じような概念がひき出せる。アフリカの北西部には、Atlas 山

脈があり、この名は、巨人Atlasの名から由来したものである。この付近には、スペインのthe Straits of Gibraltarがあり、このあたりの地形が、打ち上げられた鯨に似ている (p.15) など、第IX章‘The Sermon’で、大西洋の入口としてこのあたりの地のもつ象徴性が語られている。二本の柱の意味については、『白鯨』のかくれた意味と象徴(2)ですでにのべた。Atlantesは、二本の男像柱であり、天を支える、地の柱である。丸い地球を支えているのも巨人Atlasだと考えられていた。また、古代人が、西方の楽土であると信じていたAtlantis島も大西洋にあったと伝えられている。Platoの*The Republic*は、水没したAtlantis島であったといわれている。またPlatoは、靈魂不滅説を信じていたといわれている。

インド洋には、Moluccas (p.35, p.62) を含むSpice Islandsが、赤道周辺にある。このあたりには、Malay PeninsulaとSumatraのあいだにStrait of Malacca (p.487) がある。JavaとSumatraのあいだには、Sunda Straitがある。Pequod号は、狭いSunda Straitを通って行く。インド洋には、これらの海峡があつて、太平洋に入って行くための通路になっている。島々の岬は、通路の両側に立ち並ぶ柱廊のようである。

Pequod号は、太平洋で、渦の真中を通って、鯨とともに海底に沈んだ。沈んだものがふたたび上げられるのが、Jonahのたとえである。太平洋、大西洋やインド洋が、樂園や復活を予想するものとして、象徴につかわれているのが、あきらかである。Pequod号の男たちが、New Bedfordに咲く紅ばらや樹木に復活する、という暗示があきらかである。不毛の中から咲く花、という意味では、砂漠の王IshmaelとQueequegとの、不毛の婚礼からも花が咲く、という寓意はあきらかである。Queequegは、黒い岩山の王である。第XIII章‘Biographical’参照。その紅ばらは、いばらの中から咲き、いばらとは、銛のことである。IshmaelとQueequegは、Atlantesの二本の男像柱のように、柱頭に復活の神殿を支えているようにおもわれる。そのまわりには、紋章のように象徴的な銛の垣根がとりまいている。New Bedfordは、創造の最後の日の捨て石からつくられた、upon the barren refuse rocks thrown aside at creation’s final day (p.62) が、この比喩は、家造りらの捨てた石が隅のかしら石 (head) になった (the stone which the builders rejected, the same is become the head of the corner (Mat, 21:42) からきている。岩とは、不毛と死の表象であり、同時にキリストの表象である。岩には、相反する両極端の意味が表象されているように、白鯨にも、救いと破滅など対称的な概念の表象を見るべきである。対称的な、矛盾するかに見える概念が、一つの表象の中に、重層的にふくまれているため、表象は、解釈上、つまづきの石となりがちであるところに、この作品の特殊性がある。作品の解釈として、悲観論が大勢を占めてきたが、それは、この作品の表象の、二律背反性に負うところが大きい。Peter Coffinは、headの表象はつまづきの石になる、といっている。I rather guess you’ll be done brown if that ere harpooner hears you a slanderin his head. (p.44) これは、表面上は、しゃれこうべを中傷しているのをきかれたら、お前さんは、銛打ちにきつね色にこんがり焼か

れてしまうよ、である。brownは、すぐまえのgreenの縁語であるが、do brownに、まんまとかつぐ、の意がある。slanderには、つまづきの石、の意がある。そうすると、headの解釈につまづくと、かつがれてしまう、ことになる。

### ‘Hark’

この章は一頁にもみたくない短い章である。男たちが一列に並んで、真水の入った大樽から日常の小口使用のために、バケツ・リレーで水を運んでいる。月の輝く静かな夜更けである。ArchyとCabacoが、船底に人の気配がする、と云って囁きあっている。Archyという名は、弧状のもの、の意であり、Cabacoの頭文字のCも同様に、弧状のもの、である。この章には、Cではじまる語が多い。Cholo, Cough, Carambaがあり、Cabacoが3回ある。小文字のCではじまる語でも、cordonが2回、coughが2回、ほかにchapがある。わずか33行の章の中に、Cのつく綴りが多すぎる。あきらかに、これは意図的である。また、old QuakeressはBildad’s sister Charityをさしているから、ここにもCの記号がかくされていることになる。注意せよ、と云わんばかりに、carefulの語も見られる。さらに引きつがれて、次章は、‘The Chart’と題されているから、記号としてのCには、かくれた意味がふくまれているものと当然考えられる。moby-Dick全体を通して、C, A, O, H, などのアルファベット記号が、その形に意味がある象形文字としてのような用いられ方をしている。その実例については‘Loomings’から始まるPequodの出発までの一週間を扱った章を参照されたい。

XLIII章の表題は‘Hark’となっており、CabacoとArchyが聞き取ろうとして耳をすませる物音は、実際には、Fedallahらの潜伏が感づかれているのだが、あるかなきかの気配であって、彼らの人影は、まだこの時はThe phantoms (p.290)である。運命のはた織りの最初の物音は、かすかであって、まだほとんど感づかれていない。このような瞬間をあらわす比喩は、Harkという耳をすませる意の語や、夜更けの夜直midnight watch、や、もっとも深い沈黙deepest silenceなどの語にふくまれている。また、つぎのような、はた織りの比喩の中にふくまれている。

“Say what you will, shipmates; I’ve sharp ears.” “Aye, you are the chap, ain’t ye, that heard the hum of the old Quakeress’s knitting-needles fifty miles at sea from Nantucket; you are the chap.”

“…there was something of that sort in the wind” “Tish! the bucket!”

それは、the hum of knitting-needlesと、ちえっ、という意のTish!である。Tishにはうそのかたまり、織りませる、などの意がある。Charityおばさんの編針のブンブンという音をNantucketの沖合50マイルも離れたところから耳にすることができる。というのは、一方では、誇張のおかしさをあらわしているだろうが、他方では、Cabacoの予知能力、異常な聴

力への言及でもあると考えることもできる。Pequodの男たちは、多かれ少かれ、なんらかの超常能力の持ち主である。バケツをリレー式に手渡している作業は、織機の梭の運動を暗示している。つぎの文がそれを示している。

It was the middle-watch: a fair moonlight; the seamen were standing in a cordon, extending from one of the fresh-water butts in the waist, to the scuttle-butt near the taffrail. In this manner, they passed the buckets to fill the scuttle-butt. Standing, for the most part, on the hallowed precincts of the quarter-deck, they were careful not to speak or rustle their feet. From hand to hand, the buckets went in the deepest silence, only broken by the occasional flap of a sail, and the steady hum of the unceasingly advancing keel. (p.265)

男たちが一列に立っているstanding in a cordon; 真水のはいった手桶を手渡しているextending from one of the fresh-water butts in the waist, to the scuttle-butt near the taffrail; 手から手へ、バケツは、もっとも深い沈黙の中を進んでいく。その沈黙は、帆のはためく音とたえまなく進む竜骨のゆるがぬうなりの音によって破られるばかりであった。From hand to hand, the buckets went in the deepest silence, only broken by the occasional flap of a sail, and the steady hum of the unceasingly advancing keel; など、直立の男たち、行き交うバケツ、帆のはためき、一様な竜骨のうなり音、これらは、運命のはた織りにほかならない。上例の文には、scuttle-buttが2回、freshwater buttsが使われているが、いうまでもなく、scuttleには、急ぎ足で進む、逃げさる、の意があつて、また、buttにも、釣糸の先につける毛ばり、fly、の意がある。scuttleは、語呂として、shuttleを、容易に呼び起こす語であるから、scuttleとbuttは、梭のたとえになっている。bucketには、ポンプの吸子、の意があり、ここでは、バケツで汲み出す真水が織糸の交錯のようになががけられている。

Archyが、あのnoiseが聞えるか、とCabacoにたづねるが、この、noiseも、はた織りのhumの一部を構成して、運命の模様が織り出されていくが、その兆しが、この章でとらえられていることになる。noiseという語は3回使われている。“Hist! Did you hear that noise, Cabaco?”は、2回繰り返されている。

It was in the midsts of this repose, that Archy, one of the cordon, whose post was near the after hatches, whispered to his neighbor, a cholo, the words above. “Hist! did you hear that noise, Cabaco?” (p.265)

直立する男たちcordoon, postは、縦糸のようなものだろう。上記の二つの引用文から、この場の情景が、晴れた月夜のa fair moonlightの、真夜中middle watchであることがわかる。男たちは、声一つ足の摺り音一つたてないように気を配っているthey were careful not to speak or rustle their feet。彼らが立っているのは、主として、神聖域の後甲板で

あるStanding, for the most part, on the hallowed precincts of the quarter-deck。後甲板が神聖な祭壇のように象徴されていることについては、'Quarter-deck'の章で述べる。a fair moonlightは、おそらく満月だろう。あとの方の引用文の、repose, cordon, post, Choloなどの語には、O音の音韻が意識して用いられているように感じられる。Archyからも、円いもの、が感じられる。満月を感じさせる語感がある。すでに述べたC記号とともに、これらは、月の位相、の一つである。Cは、三ヶ日月、つもの形、などを、ここでは示しているだろう。月は、満月、三ヶ日月、闇夜、と三つの姿をもち、それぞれ、美、豊穡、予知力、を司どるとされている。Archyという名は、間接的に、月、を意味しているから、Archyは月から力を借りて、鋭い耳I've sharp ears (p.266)をもち、彼は、ハッチの下には三人の人間がひそんでいる、と云いあてている。hatchには、昇降口、の意のほか、水門のとびら、卵のふ化、細い横線の陰影、あや目、など、複数の意味が、ここではふくまれているだろう。

"Take the bucket, will ye, Archy? what noise d'ye mean?" There it is again—under the hatches—don't you hear it — a cough—it sounded like a cough."

"Cough be damned! Pass along that return bucket." "There again—there it is! — it sounds like two on three sleepers turning over, now!"(p.265)

この引用文中のunder the hatchesには、熟語として、この世からほうむられて、の意があるから、この語句には、冥界、の意もふくまれていることになる。月の姿の一つとして、冥府の女王Hecateがある。彼女は、予言・予知を司どるとされている。Fedallahたちのcoughの物音は、Hecateの支配する世界から、卵のふ化のような息吹きが聞えてきたことになるだろう。あのnoise、とArchyが繰り返す。忙しく行き交う梭の動きのように、ArchyとCabacoは、ほら、また、それ、There it is again; There again-there it is!と云ったり、バケツを取れ、バケツを回せTake the bucket; Pass along that return bucketや、Tish! the bucket (p.266)などと云って、turning overの動きを強調する。

CabacoはCholoであると書かれている。Choloは、A half-breed Indian of Peru (Feidelson)であるから、Doubloonの鑄造された地であるPeruの出身である。Doubloonは黄金であるから太陽の象徴であるが、'Hark'の章では、白銀色の月がこの場の情景を司どっている、と云えるだろう。Cabacoは、Caramba!と云って、スペイン語で感嘆する。この個所を見てみると、

"Caramba! have done, shipmate, will ye? It's the three soaked biscuits ye ate for supper turning over inside of ye—nothing else. Look to the bucket!" (p.266)

ここにも意味が重複しているのが感じられる。晩食として食べた3枚の水を吸ったビスケットが腹の中でturning overしている、と書かれているが、これには、聖餐の秘蹟の意味がふくまれているのが感じられる。バケツに気をつけよLook to the bucket!の文には、Melville

が読者にたいして、この文には注意せよ、と注意を喚起しているようなところがある。バケツに入った真水が聖水で、ビスケットが聖餐のパンのように感じられる。3枚のビスケットや、2・3人の眠っている人間 (two or three sleepers) など、3という数字は、三位一体をあらわす神慮や神の来臨などをうかがわせる数字である。

### ‘Cassok’

抹香鯨の問題の部分は、他の種類の鯨に較べて、きわめて大きい。抹香鯨が白鯨として選ばれた理由は、その形と sperm という名が象徴として意味をもつためである。聖書に「神、巨鯨を創り給えり」(創世紀)と記されている鯨の種類を抹香鯨であると断定できないが、抹香鯨が言及されていたとすれば、なぜ、その巨鯨が最初の被造物であったのか理解できる。それは、「生めよ、ふえよ、地に満ちあふれよ」(Gen. 1:22)と祝福されたように、鯨が多産を象徴するからである。鯨の汐吹きが、勇壮な射精のイメージをもつからである。『白鯨』を貫く主題は、実際は、生命の多産性である。しかし死の真只中にあるために、白鯨が象徴する陽性の、生命感あふれる、天真爛漫さが目立たない。‘Cassok’の章は、抹香鯨の形と名が象徴する多産性を前面に据えているために、突然の、陽根のイメージに読者はとまどってしまうが、生殖や生命の復元力など、希望こそがこの作品の本質のメッセージであり、悲観論は『白鯨』の表面を覆っているにすぎない。IshmaelとQueequegの関係がPolluxとCastorのような関係にあることが示されているが、このことから、PolluxとCastorの父がZeusであり多産の神であることが暗に導き出されてくる。Queequegは、彼の生い立ちを述べてIshmaelにつきのように語っているが、そこでも生殖と多産が重要なモメントであることが婉曲に示されている。

For the nonce, however, he proposed to sail about, and sow his wild oats in all four oceans. They had made a harpooneer of him, and that barbed iron was in lieu of a sceptre now. (p. 90)

Queequegが、wild oatsを播く、と云うとき、彼の言葉はたんなる修辞上の表現でなかった。Queequegは彼の存在の目的が、誕生、多産、復活、永生、など生殖を出発点とする肯定的生命論を身を以って示すことにあると、このwild oatsを播くという言葉が伝えている。‘Cassok’が、生殖、多産を讃えているのは、けっして唐突ではない。

『白鯨』には、真正面から生殖の秘儀としての意義を説いている章は少い。‘Schools and Schoolmasters’では抹香鯨のハレムが描かれている。人間のばあいについて、はっきり、このテーマが問題にされることはほとんどない。婉曲、暗示、かくれた象徴などを用いて、性について言及される場合にいたっては、作品全体にわたっていると見える。

抹香鯨の形と sperm という種類名、これが『白鯨』の主題であるが、この主題には、根拠となる出典がある。それは、Osirisの神話である。Osirisは、知られているように、Setによ

ってバラバラに切断されるが、phallusをのぞいて、断片はすべて回収される。Osirisのphallusは魚に食われてしまう。このテーマについては、'Stubb's Supper'で取り上げられている。Osirisの見失われたphallusは豊穡のシンボルである。それを食べた魚は、星座十二宮のうちの双魚宮の魚である。双魚宮の二尾の魚はヴィーナスとその息子のキューピットであるとされているので、エジプトのOsiris神話とギリシャ・ローマの神話が豊穡・多産という共通根で結ばれているのがわかる。Melvilleは、このような古代神話の豊穡・多産の伝承をすべて結び合せて、『白鯨』の中で一つにまとめ上げている。豊穡と多産は、死と再生の問題と切り離せない。Osirisのphallusと魚が結びついたらばあいの多産は、農業の豊穡・多産と相違する点がある。それは、地上の土壤に種子が播かれるのとは違って、水中に霧のようにspermを撒くイメージにかわることである。それでは、海上における死と再生はどのような形象のイメージで表わされるかといえば、太陽神と考えられたOsirisが、地平から海の中に沈むときを以って死とし、再び地平から現われるときを以って復活としたのである。太陽の黄道が地平線から下へ、海中へ沈むとき、つまり秋分の日をもって、太陽の死とし、黄道がふたたび海中から現われる春分の日をもって太陽の復活と考えられたのである。

Cassockをまとった刻み係の姿は、Osirisのphallusを法衣としてまとい、Osirisが切り刻まれた故事を再現して、多産・死・復活・豊穡の循環を祈念し、儀式をとり行っている神官の姿となる。『白鯨』の中では、鯨は、地球上で太陽の動きを模倣して、回遊しているように描かれているのは容易に気づかれるだろう。鯨を切り刻むのは、Osirisと重ね合せているのだが、同時に、抹香鯨の形が巨大なphallusに見えること、汐吹きが射精に見えること、太陽が秋分の日、いわば死んで海中に沈むのをまねて、鯨に死を与えるが、それは再生して豊穡と多産を再びもたらすためであること、など儀式としての意味が大きい。

鯨のばあい、死と再生は、刻まれて焼かれ、不純物を取り去り、上質の油にかわることである。鯨がより価値の高い物質に変成する、など錬金術の考え方がうかがえる。Ahabは、ひたすら、秋分点付近で秋分の頃に白鯨に出会えるものと、超絶的直観によって知っており、白鯨とともに沈む準備をすすめている。自身の死が、太陽神としてのOsirisの死とだぶり合せられているが、それは、彼岸で復活したいAhabの願望がこめられているためであるのを見落すことはできない。Ahabが求めているのは、Ishmaelがすでに得ているような永遠の命である。

太陽の復活の日は、春分の日というよりは、冬至の日であると考えられている。事実、『白鯨』の物語が始まり、Ahabの存在や、白鯨の存在や、おぼろげに浮び上り始めるのは、待降節、降誕祭など冬至の頃である。太陽の復活の頃から物語を起こし、秋分の候のその死までの太陽の動きをたどり、Ahabは、太陽の、あるいはOsirisの祭儀を行いつつ、自身および乗組員の死の準備をする。鯨は、Osirisのphallusの象徴として、およびJonahの復活のための乗物として、Ahabはそこに永遠の生命の豊穡を夢見たと云える。Melvilleは

また、抹香鯨のみならず、Cape Hornも、地形と字義をかながみて、大自然の中に存在する男根イメージとみなしている。きざみ係が着ている皮袋は、『白鯨』の中心主題を理解するとき、法衣と呼ぶにふさわしい。

### ‘The Lee Shore’

Ishmaelは、海上へ出帆したばかりのPequod号の舳にBulkingtonという名の男が舵を取っている姿を見かける。IshmaelはすでにSpouter-Innで彼の姿に出会っている。そのときのBulkingtonとPequodの舵を取っているBulkingtonは同じではない。Spouter-InnでのBulkingtonは生身の人間であり、他の船乗り仲間たちから語りかけられたりしている。しかしPequod上の彼はそうではない。船の仲間たちは彼の姿に気がついていない。Pequodの仲間たちの中でBulkingtonを見た者はIshmaelだけである。考えられるのは、Ishmaelが見たのは、生きている人間としてのBulkingtonではなく、彼の幻ではなかったか、ということになる。その理由として考えられるのは、まず、出発と同時に、Ishmaelが、この章はBulkingtonのための紙の墓碑である、this six inch chapter is stoneless grave of Bulkington (p. 148)、と云うからである。この章の原文は、2ページにわたっているが、その2ページ分を一つにつなぎ合せて並べてみると、3×6インチの大きさの柱の形をした字面ができる。柱はcolumnとも云い、columnには、新聞などの活字の縦欄式に印刷したもの、の意があり、3×6インチ平方の活字の印刷面を柱と呼んでも一向に差支えなく、その縦横の比はちょうど墓碑の形になる。

また、ギリシャ神話の半神のような姿と聖者のような印象のBulkingtonは、Pequodの出発にさきだって冬の嵐の海にみずから身を投じたことになる。Ishmaelはつぎのように云うが、それは、

Terrors of the terrible; is all this agony so vain? Take heart, take heart, O Bulkington ! Bear thee grimly, demigod ! Up from thy spray of thy ocean-perishing—straight up, leaps the apotheosis ! (p.149)

Bulkingtonは、彼が身を投じて生じた飛沫からふたたび立ち上がり復活して彼の不死身を獲得した魂がPequodの舵を取って先導をつとめており、そのBulkingtonの幻がIshmaelには見えたのだという意味ではないだろうか。Ishmaelは超常感覚に優れており、しばしば幻を見る。Terribles of the terribleは、Bulkingtonの入水を意味しているだろう。is all this agony so vain? は、Bulkingtonの命を捨てるという行為が無益に終るはずがない、と云って復活の可能性を示唆しているのだろう。勇気を出せ、Take heart, take heartと云ってBulkingtonを慰めているのは、Ishmaelが魂の復活を信じているからであろうし、この言葉には、AhabのMoby Dickを追う行為が魂の復活の探求であり、Ahabの努力が徒労に終るはずがない、という確信がうかがわれる。

mortalityをまず捨てて、朽ちない魂のみの身となって、BulkingtonがPequodを守護し導くことになった、とIshmaelが断定していると解釈できるのが、Bulkingtonの海に散った飛沫から彼の神格が高く舞い上るUp from the spray of thy ocean-perishing—straight up, leaps thy apotheosis! と、leapsが現在形で示されている個所である。Ishmaelが舳に認めたのは、すでに不死性を得て肉体をもたぬBulkingtonの幻であるにちがいない、BulkingtonはPequodの姿なき船首像になった、といえるだろう。彼の飛沫が垂直にstraight upに舞い上るのは、この作品に縦横に敷かれている十字架の比喩の一つであり、海の地平線はいつも十字架の横の梁材を象徴している。Bulkingtonの下から上にあがる飛沫が縦の梁材を象徴する動きとなっており、彼の神格が示されている。彼は、洗礼者のヨハネのようにPequodにさきがけてあとに来る者の道を示している。AhabがGolden FleeceのようなMoby Dickを探求する旅は、Bulkingtonの行為によって揺ぎないものとなり、Pequodが確実にMoby Dickのものと導かれることになるかと解釈してよいだろう。Ahabが、最終段階に近づいて航海儀を捨ててしまい、進路を船の動きにまかせ、あるいは直感によって後退・前進するのは、Bulkingtonの導きによるものとして、'Lee Shore'との関連においてもとらえられるべきだろう。

1 *Dictionary of Mythology, Folklore and Symbolism (Scarecrow)*

使用テキスト：*MOBY-DICK or, The whale edited by Charles Feidelson, Jr. (Bobbs Merrill)*

和文訳は、阿部知二訳を参照した。